
星屑のメロディー

きいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑のメロディー

【Nコード】

N8681P

【作者名】

きいら

【あらすじ】

一目惚れしやすい人魚は王子の婚約パーティーをしていた姫に一目惚れ。そして魔術師に頼んで人間になることに。薬を渡され飲んだのはいいが、その薬は……。
はたして人魚はハッピーエンドになれるのか？

一目惚れ(前書き)

初投稿です。

文章力なくてすみません…m()m

一目惚れ

ただ海に浮かんでいるだけだった。でも、それは今まで俺が見たことのないくらい綺麗で。子どもの時以来まったく地上の世界を見なかったので夢中で見入った。

色とりどりの赤や青、黄色といった光りが月よりも眩しく海を照らした。

あれがきつと前にアネキ達が言っていた…船だったっけ？

かなりの大きさだ。昔見たものと比べものにならない。感心していると、船から一人の黒い髪の青年が現れた。

青年は何かを考えるかのように遠い海をじっと見ている。

「どうです、王子。立派な船でしょう？」

ツカツカと後ろから現れたのは、丁寧にヒゲを刈り込んだ中年くらいの男だった。

「なかなかのものだな。…ご苦労」

この角度じゃ顔はよく見えないが、青年にワイングラスを持ってきたようだ。

「このたびは御婚約おめでとうございます。執事である私もうれしい限りです」

しばらく会話した後、では、私はこれと言って忙しそうに船の中に姿を消した。

（なるほど、アイツは王子で婚約したからその祝いのパーティーをしているってとこだな）

「王子、こんなところにいらしたの？」

「うわっ…!!」

あの娘めちゃめちゃカワイイっ！

「エメルダ、中にいなくていいのか？風邪引くぞ」

「だって…、あなたの傍にいたかったんですもの」

王子は少し困ったような不機嫌な顔をした。何であんな顔なんてす

るんだ？俺なんてうらやましいくらいなのに。なんだかあの娘がかわいそう。お互い好き合っているのなら絶対そんな顔はしない。ましてや婚約までしているのに…。

あの娘にはいつも笑顔でいてほしい。

…あーあ、まただ。相手のことをよく知りもせずに好きになるの。いわゆる一目惚れってヤツ。

でも肝心の相手はすでに好きな人がいるじゃん。しかもどうやら両思いらしいし。そうわかっただけでもいつも我慢できない、この胸の高鳴り。

そうだ！

あんな王子より俺の方があの娘を好きだったこと、伝えてやる！絶対振り向かせてみせる。俺の中で恋の炎がメラメラと燃え上がった。

（そのためにはまず…）

後日、決心をつけた俺は海底へと向かった。

人間へ

ギイイ…。

古びた扉を開けると、不気味なものがところ狭しと積み重なっていた。玄関というのを疑いたくなるほどだ。おそらくこの家の主である魔術士が使う道具なのだろう。

「おや、珍しいこともあるものですね。こんなところに訪れる者がいるとは」

そう言う魔術師は、口元にうつすら不気味な笑みを浮かべている。

「なあ魔術師、ちよつと頼みてえことあんだけど…」

「何ですか？やぶから棒に」

俺は自分の願いを告げた。

「いずれあなたはきつと後悔するでしょう…。人間は、わたし達人魚一族よりはるかに寿命が短い。何よりおろかな生き物だ」

「んなこと何でわかるんだよ？偉そうなこと言うな！短い時間の中で精一杯生きてる方が、俺達よりもずっと立派なんだよ！」

しまった…、怒鳴っちゃった。頼みに来たのに怒鳴ってどうする！！

「あの…、すまな」

謝罪の言葉を言おうとしたら遮られた。

「いいでしょう。そこまで言うのなら自分の目で、身体で確かめて来なさい」

そういうと何やら紅色をした液体を差し出し、飲むように促された。

「それを飲むとあなたはおそらく人間になるでしょう」

そうか、これを飲めばおそらく人間に…。

……。

…ん？

お、おそらくう！？

「どういうことだ？完璧に人間になれるんじゃないのか!？」

俺があわてて言ったのがおかしかったのか、愉快そうにこう言った。

「まだ開発中なんですけど、まあ大丈夫でしょう。以前、君と同じように頼みに来た者には成功しましたし。それでも何か不具合があるかもしれないから気を付けてね。」
「なんかキャラ変わってねえか？開発中、って大丈夫か、これ！？でも手段はこれしかない。」

鼻をつく異臭を堪えながら一気に飲み干した。

目の前がぐらりとゆらぎ、急に息が苦しくなった。呼吸をしても、口に入ってくるのはしょっぱい水で。頭も痛いし、吐き気もする。いつものように泳ごうとしても上手くない。

(く、苦し…)

必死にもがいてやっとのことで海面に浮かんでこられた。

「ぷはあっ…っはあ、はあ…」

死、死ぬかと思った…。

「あ、いい忘れてましたけど、人間は水の中では息ができませんよ。」

(言うのが遅い…！)

呼吸が荒くてしゃべれない俺は、思いつきりコイツをにらんでやった。

…いや、待てよ。

今のコイツの言い方だと俺は人間になれたってことか？尾ヒレを見ると、そこにはそれはなく、代わりに2本の足がついていた。

「っしやああっ！…！サンキュー！」

「それはどういたしまして。とりあえず岸に上がってはどうですか？このままではあなたがいつ溺れるかわかりませんからね。」

うっ…、くやしいがコイツの言う通りだな。なれない泳ぎで、やっとのことで岸までたどり着いた。

(さてと、これからどうすっかな？)

少なくともあの娘に会うためには、どこかの城に行かなければならない。辺りを見渡しても日が落ちてしまったので、暗くてほとんど何も見えない。第一手がかりも何も無い。

(まあ、なんとかなるか)
いつものポジティブさと好奇心旺盛な性格のおかげで、不安よりも
楽しみの方が大きかった。

人間へ（後書き）

ここまででは普通の人魚姫とほぼ同じなんですけど……。さて、これからどんな話にしていきましょっか？

がめつい魔術師

岸が上がってこの場から離れようとする。

「ちよつと待ってください」

「んだよ？」

「何か忘れていませんか？」

最初から何も持って来てないので忘れる物なんてないはずだ。

「お礼ですよ！お・れ・い！！まさか私がタダで動くと思ったのですか？」

「そういうことは最初に言っておけよっ！」

あーあ、俺、何も持ってないし。その辺に落ちているものを見てもワカメや貝殻などの使い物にならないものばかり。コイツがこんな物で首を縦に振る訳 ないよな…。俺がウンウン悩んでいると思いついたように口を開いた。

「そうですね…。アナタの歌が聴きたいですね」

へ…？

「そ、そんなことでいいのか？そんな簡単なことでいいんなら…」俺は息をスウツ深くと吸い込んだ。歌に集中して、周りの音が聞こえなくなる。いつも海の中で歌っていたけれど地上で歌うのも悪くない…。むしろ気持ちいい。最後まで歌い上げると渴いた音が辺りに響いた。

パチパチパチパチ。

「噂には聞いていましたけど、やはりアナタの歌声は美しいですね。本当はその声が欲しかったところですが、私はどこその魔術師のように残酷なことはしたくありませんから」

魔術師は辺りを見まわしながら、もう時間がありませんね、と言いつ一枚のウロコを俺に渡した。蒼く光るそのウロコは見覚えがある。

そう、それはまぎれもなく俺の…。「アナタのウロコです。これを飲めばもとの人魚の姿に戻れます」

なんだ…、コイツ、意外といい奴じゃん。見直したぜ。

「では、私はこれで」

そう言っただけで立ち去るかと思いきや、俺に近づき、アゴを持ち上げたかと思うと…。ちゅっ、と音をたててキスをしゃがった。

「なっ…！んなっ…！」

前言撤回。

やっぱりコイツはやな奴だ！っつーか変態だ。殴ろうとしたらもう海へ帰ってしまった。

（ナニ考えてんだ、アイツ？）

もうアイツのことを考えるのはよそう。会うことはこれきりだろう。住む世界も違ってしまったんだし。しかしほんとにこれからどうしよう。着るものも何もないし。

「さむ…」

今は3月だ。

暦の上では春だけど素っ裸ではさすがに寒い。ザッザッザッ。

誰かが歩いてこっちに来る音がする。

（やばっ…！）

こんな格好見られたら一発で取り押さえられる。あわてて岩陰に隠れた。暗くて誰かわからないがシルエツトからして男だというのは間違いない。月が雲から顔をだし、辺りがうっすらと明るくなった。足音はだんだん近づいてくる。

謎の人物

空さえも俺に味方してくれなかったのか。生憎、今夜は満月だった。星も綺麗に輝いている。

（早くどっか行つてくれえ〜…）

そんな俺の願いは次の瞬間浅はかに散った。

「おい、お前。そんな格好でここで何やっている？」

（ひい〜っ、バ、バレたーっ！）

ああ、もう最悪。人間になつたとたんに牢屋に入るのか。さよなら、俺のエンジョイライフ。さようなら俺の春。

諦めて岩陰から身を出したのはいいが、この状況、何て説明しよう…。

「えっ、えーと…つくしゅー！」

あ、こんな時にくしゃみが。

バサッ！

え…？上着をかけてくれた…のか？

「あの、ありがとっ」

「…とりあえずこっちへ来い」

このままここに居てもどうしようもない。けど、訳わかんねえ奴について行くっていうのも何かなあ…。結局俺は戸惑いながらも、言われるままにおとなしくついて行った。

海岸からしばらく歩き、林を抜けて屋敷みたいなところにたどり着いた。いや、屋敷と言うよりこれはむしろ城だな。中に入ると使用人達が夜なのにせわしく動き回っていた。

「すまないがこの者に着るものを用意してやってくれ」

そう言う和使用人の一人が短く返事をすると思行つてしまった。しばらくすると先ほどの使用人が服を抱えて持って来た。

「もう捨てようと思っていたのですが、ちょうどよかったです」

取り出した服は明らかに貴族が着るような服で。捨てるにはもった

いないくらい豪華だ。寒くて手がカタカタ震えたのと、複雑な作りで着るのに戸惑っていると使用人が手伝ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

礼を述べると彼は軽く笑みを浮かべ足早にその場を後にした。どうやら捕まったわけじゃなさそうだ。着るものも手に入ったし。その時メイドがやって来た。

「ブレイブ様、お風呂の準備ができました」

「悪いな、今行く。お前も来い」

何だよ、さっきからえらそうにしゃがって。にらみ上げるとその顔はどこかで見ただことあるような…。でも思い出せず、言われるままについて行きバスルームへ。

夢見月の夜（前書き）

謎の人物視点です

すみません。

誰視点か書くの忘れてました。

夢見月の夜

俺はどうかしているのだろうか。昔、夜の海で出会ったあの子をまだ忘れられずにいたとは。いや、本当に会ったかどうか定かではないが…。

俺はあの嵐の日から……両親を奪ったあの嵐の日から、每晚この海岸へ散歩するのが日課となっていた。

別に両親の死に未練が残っていた訳ではない。心のどこかでまたあの子に会えるのでは…と信じていたからだ。

でもダメだった。今日もまた会えなかった。やはり、あれは夢だったのだろうか？

（あの岩場まで歩いたら帰ろう）

そう思い岩場へ向かった。ふと、月が明るく岩陰を照らした。そこには驚いたことに……人がいた。この寒い中、何も身に纏わず。

「おい、お前。そんな格好でここで何やっている？」

バレないと思っていたのだろうか。ま、この辺りで隠れる場所なんてほとんどない訳だが。

そいつは肩をビクツと震わせ、思案した後におずおずと岩陰から出てきた。

細い体に俺よりも低い背丈。男なのは体で判断できるが…。

（まだ子供なのだろうか）

彼はうるたえながら俺へ返答しようとする。

「えっ、えーと……つくしゅー！」

慌てて鼻を抑える……が時すでに遅し。もうくしゃみは出てしまった。しどろもどろになっていたが彼は小刻みに震えている。月光のせいだ、肌がやけに青白く見えた。俺は自分の上着をバサツとかけてやった。少し乱暴だっただろうか。

彼は大きな目をぱちくりとさせたが、ようやく自分が何をされたか理解したようだ。

「あの、ありがとっ」

そんな彼の仕草を俺は

(可愛い)

そう思ってしまったのだ。見知らぬ……しかも男を。

「……とりあえずこっちへ来い」

そんな思いを悟られないよう短く言い放った後、踵を返し歩き始める。すると少し遅れて小走りで砂を踏む音がこちらに近づく。その音に内心ほっと胸をなで下ろす自分がいた。

いつもならこんなことはしなかった。感じなかった。そう、

きつとこれはこんなにも輝いている空のせい。月のせい。

……きつと惑わされたのだ。

あの小さな星達の輝きに。この思い出の海の波音に。

大嫌いなオツドアイ

(たしか風呂って汚れた体を洗う場所だったよな)
入り方は知識としてしかなかった。そもそも人魚には風呂なんて必要なかったから。

いくつもある部屋を通りすぎ、ようやく風呂場にたどり着いた。まったく、どんだけ部屋があるんだ。俺の家なんて一人一部屋でどうか部屋数が足りたっていうのに。
そんなことを思いつつ、脱衣スペースで服を脱いだ。さつき着せてもらったばかりなので、またこの複雑な服を着なければならぬと思っただけで少しワクワクした。話でしか聞いていなかった世界が今目の中にある。
「うわ、広…」

アネキ達に話を聞いていたがそれ以上の広さだった。俺の部屋の倍以上はある。恐る恐るタイルの床に足をそっとつけてみる。足から感じ取れる感触ではツルツルしているようだ。滑らないように気をつけないと。そう思った矢先に、つるんっ。
ゴツツ…!

鈍い音が聞こえた後にじわじわと大きくなっていく痛み。

「つてえーっ！」
かなり大声で叫んでしまった。どうやらここでは声が響くみたいだ。あまりの痛みに俺は頭を抱え込んだ。脱衣し終わった王子が何事かと驚いた顔でかけつけた。しかし現状を見ると強張った頬が少し緩み、プツと吹き出した。

「大丈夫か？」

しゃがんで手をさしのべる。その行動はとても紳士的なものを感じ

られた。

「なんともねえよ」

さしのべた手に掴まらず自分で起き上がった。顔上げたその時に、初めてコイツと目が合った。それから、しばらくじいっと俺の目を見つめていた。

「な、何だよ」

男同士が見つめ合うなんて気色悪い。

「お前綺麗な眼をしているな」
え…。

この眼は母親以外、今まで誰も褒めてくれなかった。いや、気持ち悪がられたことしかなかった。アネキ達でさえ昔は俺の事を気味悪がっていた…。だから俺はこの眼が嫌いだったのに。
フツと昔の記憶が蘇る。

あれは12年前。

学校に入学して自己紹介をし終わった休み時間の時だった。ずかずかと俺の周りにクラスメートが集まって来た。

「ねえ、なんで目の色が片方ずつちがうの？」

「なんかきもちわりいな」

「ってゆうか、なんかこわくない？」

口々に、変だの気味が悪いだの言い出した。俺は辛くて、悲しくて唇をぎゅっと噛んだ。涙で視界が歪む。それでもなんとか声を上げて泣くだけは堪えた。家に帰って俺は母さんに聞いた。

「なんでオレ、こんな変ないろの目のの？」

そう言うとう母さんは悲しそうな顔をして、何も言わず俺を抱きしめた。なぜか涙がこぼれた。何度聞いても、そんなこと言わないで、ってひどく悲しそうな声で言われる。その時俺は母さんを傷つけたと思った。俺は家を飛び出した。家には居たくなかったから。何がしかかったのか…：そんなことわからない。ただ逃げ出したかっただけかもしれない。独りになりたかったのかもしれない。

そして子どもが行ってはいけないと言われていた海上に行った。その時に初めて船を見たんだ。へんな箱が浮いているってびっくりしたのを覚えている。でもそこから先は思い出せない。気がつくとき家のベッドに寝ていた

「…い」

「おい、本当に大丈夫なのか？」

ぼんやりと立ったまま回想に浸っていたようだ。

「あ、ああ」

嫌なこと思い出ししまった。とにかく今は風呂だ、フロ！

「お前、名は？」

「へ？」

突然のことだったので、すっとんきょうな声が出てしまった。

「え、えと…アズール」

「そうか、俺はブレイブだ。よろしくな」

な、なんかこういうのって照れるな、友達になるみたいで。改めてブレイブを見る。

艶やかな黒髪。俺には一生手に入れることのできない、真っ黒な瞳。鼻もスツと通っている。

……あー、やっぱりどこかで見たことあると思った。やっと思い出した。コイツたしか船に乗ってた奴じゃん。

「どうかしたのか？」

いつのまにか湯舟に入ったブレイブが問う。

「うっん」

取り残されたような気がして俺もあわてて湯舟につかる。程よい湯加減で気持ちいい。

「はあ…」

温かさでなんだかほっとする、だけど…。

「……………」

会話がな…。ものすごく気まずい。何か話さないと…。でも、何を？俺と共通の話題なんてないだろうし…。

結局、その後二人とも何も話すことなく無言で風呂から上がった。

大嫌いなオツドアイ（後書き）

ちなみに私は3人姉妹ですが、一人一部屋が憧れです（泣）
一人部屋が欲しいと何度願った事か…。

リアルな夢

今日はいろいろありすぎてくたくただったので早く床につかせてもらった。案内された部屋には大きな窓があつて、夜空がよく見える。「おやすみなさいませ」

軽くお辞儀をしたメイドが言った。

「おやすみ」

そう言つてベッドに横になった。目を閉じると、猛烈な睡魔が襲ってきた。こんなに眠くなつたのはいつぶりだろ？

ある夢を見た。そこは夜で、俺は小さい頃の姿だつた。当然まだ人魚のまま、海面から顔を出していた。いつもと同じようで違う景色。

さっきまで晴れていた空にはいつの間にか、ぎっしりと雲が敷き詰められていた。その時、突然激しい雨が降り出し雷も鳴り始め、いよいよ本格的な嵐になろうとしていた。そんな中浮かんでいたのが一隻の船。大きな船だけど今の状況だとどんなに大きな船でも危なく見えた。風も吹き始め大きな波が容赦なく襲い掛かる。荒れ狂う波にのみ込まれそうになっていた。船が大きく傾いた瞬間、人間が投げ出されるように落ちていった。

「あつ」

そう言つた時にはもう人間は海の中。本当に一瞬の出来事だつた。目の前に見えるのは海の青だけ。それでも俺は、なぜか無我夢中でその誰かを助けようとした。けれど、荒れ狂う波のせいでうまく泳げない。不意に目の前に大きな波が迫ってきて　のみ込まれる

そう思つた時に目が覚めた。

「ハアツ、ハア…ツ。何だよあの夢…」

シャツは汗でぐっしょりになっていた。とりあえず落ち着こう。気

を沈めるために窓の外を見ると、月が静かに闇を照らしていた。あんなに綺麗に思えたのに今では少し不気味に見える。何でかわかんねえけど、すごく嫌な気がする。明日がくるのがとても不安だ。けれど5分もたたない内にまた眠気がやって来る。そのまま引きずり込まれるように眠りに落ちた。

副作用？

朝、めずらしく起こされずに起きた。

(「ここ、どこだったけ?」)

ウーン、と大きく伸びをする。だんだん意識がはつきりすると、昨晚のことを思い出した。

(「そっか。俺、人間になつたんだ」)

改めてその喜びに浸る。

(「そーだ、ちよつと走ってみようかな」)

部屋に備え付けられている洗面所で顔を洗い、上着を羽織ってこれで準備万端! 家の中で走り回るのはさすがにマズイな…。外に出よう。まだ朝早くだったから外は少し肌寒かった。それでも構わずぐんぐん走った。行き先は 迷う前にあそこしかなかった。ざっばーん。

砂浜に波が押し寄せる。やっぱりここが一番落ち着くなあ。昨日もこの海にいたはずなのに、何だかとても懐かしい。

(「今までずっとこの中で過ごしてきたからかな」)

砂浜を歩いてみると、昨日の岩らしきものを見つけた。なんとなくそれによじ登り、上にちよこんと座った。そして海をじつと見つめた。今になってからいろんなことが心配になる。

(「アネキ達、心配してるだろうな。母さん怒ってるかな…」)

「だーっ、もーっ!」

うじうじしていたってしょうがない。せつかく人間になれたんだ。今をじっくり楽しまない!

ブルーな気持ちを手拭し、ポジティブ思考へと切り替えようとする。それにしてもさつきから風が吹くたびに、何かがサラサラと頬に触れているような…。顔洗った時も邪魔だったし。手で払ってもとれない。ちゃんと鏡を見ておくべきだったな…。

「…んだよ、コレ?…ついのでで、って…えっ、髪!?!」

一日でこんなにのびるのか？いや、んな訳無いよな。一日に髪の毛が伸びる長さはたしか約0.35？だったし。薬の副作用か何かだろう。

「それは違いますよ」

「は?!」

声ができる方に目を向けると、そこに居たのは

「……はあく、またお前かよ!!?つか何でここに居んだよ……」

「ため息とはひどいですね。…以心伝心というものですよ。アナタに呼ばれた気がしたので」

もうコイツには何を言っても無駄な気がする。

「んで、何か用かよ?」

早くコイツを追い払いたい俺は、単刀直入に用件だけ聞こうと思っ
た。

「いきなり用件ですか。はあ…、まあいいでしょう」

むかつく。何?そのため息。いきなり来たのはお前のくせに!!
待て、ここで怒ったら俺が負けた気がする。落ち着け落ち着け落ち
着け。ここは一旦我慢だ。

「開発中で渡した薬が原因なんですが…」

言いながら歩み寄って来る。そうして目の前に来たかと思うと、い
きなりシャツの第二ボタンまで外した。

副作用？（後書き）

ユーザーページに何だかんだ書いてるけど結構な頻度で投稿している自分。その内、週一になるかもしれない（汗）

おもしろいネタが浮かばないや（・・・）

二つの姿（前書き）

微エロです（多分）

エロ書くの苦手です。。

二つの姿

「何の…つもりだよ？」

突然のことで俺は動けずにいた。ニヤニヤ笑う魔術師はスツと俺の胸に手をやり…。

「どうやら君は体が女になってしまったみたいですね」

そう言っただけで顔で胸を揉む。変態、スケベ、エロ魔人…。どんな言葉でも言い表せないくらいの変態っぷり。

「大きさも申し分ない」

「いい加減にし…っあうっ…」

殴ろうとしたら、服の上から胸の尖りをつままれ弄ばれる。俺のものとは思えない高い声が漏れた。おかしいな、声は変わってないはずなのに…。

「やっう…はあっ…」

魔術師はそんな俺の反応を楽しむかのように手を這わせる。だんだんエスカレートするセクハラ。抵抗しようとしても腕に力が入らなくて。せめて声だけは出ないようにと必死に堪えた。

それをいいことに、引っ掻いたり指の腹で転がしたりという所作を執拗に繰り返す。布の上からという何とも言えないむず痒さ。そしてその手はだんだん下へ…。ズボン越しから俺の性器に触れた。

「ひっ…!？」

恐怖からか、快感からか。身体がビクツと身震いした。

「ほら、女性になった証拠に　　ついてないでしょう？」

そこでやっとならぬ手が止まった。

「…っざけんな！急に何しやがる!？」

「あなたの反応がかわいかったのついで。気持ちよかったですか？」
ま、まあ…ちよつとだけ…。って何考えてんだ?! しっかりしろ、俺!!!

「そ…んな訳ねえだろ!!!」

「ほお、それにしては…、今も随分と息が荒いようですが？」
うぬうう、コイツめえ〜！

「体は正直ですね。ココなんてこんなに固くなっているのに」
そう言っただけでまた服の上から先程と同じ所を、今度は撫でるように触る。

「嘘つきさんにはお仕置きをしたいところですが、よろしいですか？」

くいつと顎を持ち上げられる。この流れだとさっきよりもヤバい事されるのは目に見えている。それだけは避けたい。

「断る」

残念ですね、と言っている魔術師の顔はまだニヤついている。こんな変態でもよく魔術師が勤まるなど改めて思う。

「初々しい反応でしたよ。もしかしてまだ童…それ以上は言うな」
こんな奴に言われてたまるか！くそお……。

とりあえず一発殴つてから元の姿への戻り方を聞いた。こんな姿じゃあの娘の恋人になれねえじゃん。一刻も早く元の姿に戻らないと…。

「それはわかりません。ああ痛い痛い」

俺に殴られた頬をさすりながら答える。

ハハハ…。そんな答えが許されると思つてんのか、あゝあゝ？

「ただ、昨日の夜は男だったので、夜になれば戻れるでしょう」

「それまでずつとこの姿のまんまかよ？」

「はい」

城の人達やブレイブに何て言えばいいんだよ。昼間は女になって夜は男に戻りますって言うのか？

(まじかよ…)

全身に嫌な汗が流れる。

「そうそう。ここに来て私を呼べば、いつでもイロイロ…お相手しますよ」

「…お前、一回死んでこい」

かくれんぼ

部屋に戻った俺は鏡で自分の姿をじっくり見た。第二ボタンまで外されたシャツからちらりと覗く胸の谷間。腰の辺りまでのびた少しくせ毛っぽい茶色の髪。そして嫌と言う程目立つ、左が黄色で右が青色の瞳。

変わっていないのは顔と声と心。

「ふう……」

ため息をついた後、服をきつちりと着直す。特に胸の辺りがバレないように細心の注意を払って。それから、上着を着てボタンをすべてかけた。少し苦しいけど我慢、我慢……。

髪は……切ろう。

しかしハサミがなかなか見当たらない。机の引き出しを開けてもタムマシンドころか、何も入っていない。どうしようかと悩んでいたその時、ノックもなしに部屋の扉が開いた。突然のことだったのでとっさにベッドに潜り込んで息を潜めて隠れた。そして布団の隙間から外の様子を伺った。入って来たのは……ブレイブ？

いや、似ているけどちよつと違う。少し幼い。

「は〜疲れた」

盛大なため息。聞いているこっちまで疲れそうだ。

「朝食までまだ時間あるし……。うん、ちよつとだけ寝よ」

え？寝るってやばいんじゃない……。ちよつ、どんだんこっちに近づいてるし！

こっちもなったからにはぴくりとも動けない。

何でこっちもなったんだ？ハサミを探してただけなのに。大体アイツは誰なんだ？

そんなことを考えている間にベッドへダイブする青年。

「どーんっ」

「うむっ……」

どうして普通に寝ないんだ？なぜわざわざダイブした？疲れているんだろ…。

「あれ？先約がいた…。ま、いや。こっち半分僕ね」
「そんなんでいいのかよ？！マイペースな奴だな。」

「てか、君誰？」
起き上がって布団を剥ぎ取るうとする。でもここで気づかれたらせつかく隠れた意味がない。俺も負けじと包まる。

それからしばらく布団の引っ張り合いが続いた。傍から見ると、今やっている事は明らかに幼稚園レベル。俺は本気でやってるのに、上に乗つかてる奴はおもしろ半分って感じで笑っている。

ベッドのスプリングがギシギシと軋む。

「ここ僕の部屋だよ？無断で入るなんて…君、いい度胸してるね」
フツと笑ったその後、引っ張られていた布団からその力が消えた。ベッドからも離れる。

（えらく素直に諦めたな）
ほっとして力を緩めたのが間違いだった。

「隙アリッ」

べりっつと布団を剥がされた。

じーつと音が出そうな程こっちをジロジロと見ている。ようやく口を開いて何を言うかと思いきや…。

「君、男？女？名前は？何歳？」

一気に質問攻め。

「え、えーと俺は男だ。んで名前はアズール。それで…何だっけ？」

「歳」

「そうだ、そうだ。歳は18…で、それが何だよ？」

今気がついたけど、知らない奴に名前言ってしまった。プライバシってこういう所から流出していくんだよな。

青年を見ると、俺の姿を上から下までしげしげと興味深げに眺めていた。

「君が男だつて？ほんとかなあ？」

言ったのが先か、俺の腕を片手で逃げられないように固定し、着ていたジャケツトを脱がされる。せつかく胸を押さえ付けていたのにそんなことはお構いなしに、そのままシャツのボタンをぶちぶち外しはじめた。

「胸はあるみたいだね」

確かめるように触る。

「ばっかやる…！触んな！」

「何？もしかして…感じちやつた？感じやすい身体だねえ」

クスクスと笑う顔は無邪気なんだがやっっている事は邪気ありまくり。また、魔術師にやられたことをされるのか…。

かくれんぼ(後書き)

あれ？お金もちって部屋の中でも靴を履いてたような…。
いろいろとおかしい所があつてすみませんm(|) m

新たな能力

いや、させねえ！

「やめろっ、この変態が！！」

ハイパーウルトラアズールキックをお見舞いしてやった。

「ぐふっ…。はっ…、入…た…」

俺のハイパーキックは見事鳩尾みそおちにクリーンヒットしたらしく、痛そうに腹の辺りを押さえていた。

しばらくすると、シャツのボタンを閉めてジャケットを着させてくれた。どうやら先程の痛みを思い知り、ふざけるのをやめたらしい。

「あーあ。せつかく触診ごっこしてたのに」

残念そうに笑って言うのだが、あのまま放っておくと“ごっこ”どころじゃ済まなくなっていたと思う。考えるだけでも恐ろしい。

「それにしても今のはちよっと効いたな…」

まだ痛そうに腹の少し上をさする青年。やっぱり強く蹴りすぎたか。どうも力加減が難しい。

「…そりゃ悪かったな」「ん〜、君がさすってくれたら治るかも」

「もう1発蹴ってやろうか？」

人間になると、蹴るといふ実に便利な能力が手に入った。

「アハハッ アズールはおてんばだね」

「おてんばっていうのは女に使う言葉で…」だったら間違っていないじゃん」

うっ…。この姿じゃ確かに間違いではなくなるな。くそっ…反論できない。

ぐう〜、きゅるう〜。

「あ」

何でこんなタイミングで腹が鳴る？俺の身体ってつくづく空気を読まない。

「ふふっ、お腹空いてるの？それじゃあごはん食べに行こっか」

こんな変な奴に笑われたーっ！ムカつく…、悔しい。

この変人の言う通りにするのはさらにムカつく。だけど腹が減っているのは事実。

…… 渋谷コイツの隣りを歩いた。

新たな能力（後書き）

毎度のごとく無駄な事ばかり書いているあとがき。そして毎度のごとくいいタイトルが浮かばない。

今回は話がかなり短くなってしまいましたm（|）（|）m
何か新キャラ？の名前がなかなか思いつかなくて（汗）

それでもこれを読んでくださってる方に感謝です。ありがとうございます。
います。

理由

テーブルにはおいしそうな数々の料理。俺には痛いほど突き刺さる視線。

「あのさ、そんなに見られてちゃ食べづらいんだけど…」

気になるのはわかる。急に性別が変わってるんだからな。無理もないだろう。

「だって、お前：「理由は後でちゃんと言うから」

しばらくの沈黙。

ブレイブの方を見ると目が合った。早く話してくれって顔しているような気がした。

「あのさあ、僕の存在は無視ー？」

気まずい雰囲気をぶち破るのんびりとした口調。

「そういえばムゼット、何でお前がここにいる？この前のパーティーの後、帰ったんじゃないのか？」

そうか。あいつ、ムゼットって名前なのか。

「ひどいなあ。用が無くちゃ来ちゃいけないの？せつかく従兄弟が遊びに来たのに…。ねえ、アズール？」

知るかよ、そんなこと。俺に話を振るなよ！

「もうアズールと知り合ったのか？」

「うん。何か僕の部屋に居たから」

「あそこはお前の部屋じゃない。来客用の部屋だ。お前が来る度あそこに泊めているだけだ」

会話が盛り上がる？中、俺は黙々とごはんを食べた。だって人間の食べる物は珍しい。しかもどれもこれもこれも美味しい！

「アズール、そんなにがつつくと喉に詰まるよ？」

「?!つうぐ…」

言われた矢先に…。何で俺はこんなにドジなんだ。

「大丈夫か？ほら、水だ」

「んぐっ、んぐっ、ぷはあっ」
ブレイブが水を渡してくれたおかげでなんとか助かった。こ、今度からはじっくりゆっくり食べよう…。

朝食を終えたところで、ブレイブに今の姿の理由を話すことにした。言ったところで信じてくれるかどうかかわからないが…。

「えっと…。その…、俺さ、ちょっとした事情があつて特別な薬を飲んだんだ。そうしたらこうなつた。」

ブレイブとムゼットは黙つたまま、じつと聞いていた。

「そのせいで昼間は女、夜になつたら元の男の姿に戻られる……らしい」

言い終えブレイブの顔を見る。何とも言えない複雑そうな表情をしている。

「軽蔑……するだろ？」

俺は答えを聞くのが怖くて二人の顔が見られなかった。

何を言われるかわかっていた。それでもやっぱり言われるのが怖い、と言つより辛い。

でも、その感情は次の一言によつて一瞬で掻き消された。

「別にそんな事関係ないんじゃない？」

「え？」

今なんて…。

「そうだ。少し驚いたが…、変わったのは外見だけ…。違うか？」
知り合って間もない2人からこんな言葉がかけられるなんて、思っ
てもみなかった。

「へへ、サンキューな」

人間は思っていた何倍も何倍も優しく、心が広がった。

獅子奮迅

城に居座るようになって一週間。時が経てば俺の性別変化は治る…
…訳もなく。相変わらず昼間は女のままだった。

俺は部屋のベッドに腰掛け、これまでのことを考えた。

あの女の子に会いたくて薬飲んで人間になって、海辺でブレイブに
拾われて。そして城に住まわせてもらった。で、朝になったら女に
なってたんだよなあ。

「こんな体じゃなあ… かと言ってここで諦めるのも「何の話？」」

「うわっ… ムゼット!？」

いつからそこに居たんだよ?! はあ、心臓に悪…。他人の部屋に
入る時はノックぐらいしろ!! まあ、この部屋は俺のじゃないから
はつきりとは言えねえけど…。

「ねえねえ、アズール。ちよつと来て」

ベッドの縁を掴んでいた手をとられ、ぐいっと引かれた。

いきなり部屋に来たかと思えば強引に連れ出す。

(訳わかんねえの)

「早く、早く!」

俺が歩いていたのがじれったかったのか。こちらに来て文句でも言
うのかと思いきや、俺の身体はフツと浮き、視界に天井が映った。
一瞬何が起きたのかわからなかった。

「走るよ」

「へ?」

途端にファインは走り出した。

「うわああーっ!」

「しつかり捕まつてないと落ちちゃうよ?」

咄嗟にムゼットの服をぎゅっと掴んだから大惨事には至らなかった
ものの…。はあ…、コイツの行動パターンはよくわからねえ。

「どうせなら首に手を回してほしかったなあ」

こいつめ。絞めてやろうか？

そもそも“お姫様抱っこ”っていうものは男ならいつかはやりたい憧れの行為。俺もその内の一人のはずなんだけど……。

なぜ今俺がされているんだ!!

お姫様抱っこをする前にされたなんて最悪すぎる。

「降ろせーっ!」

「ん〜、もうすぐで着くから待ってて」

必死の願いも虚しく、あっさりと流された。何もこんなことしてまで急がなくてもいいのに。

「なあ、走るから降ろせよ」

「だーめ」

ああ、もう意味わかんねえよ。コイツ何がしたいんだ？

「あ、着いたよ」

そう言っつて、先にある扉をゆっくり開いた。

プレゼント

「じゃーん」

ドアノブを回した先にあつたのは1着のドレス。薄緑色を基調としていて、ところどころにクリーム色のフリルがあしらわれている。白い小花の柄もついていて、一言で言えばかわいい、だろうか。女の子にプレゼントするにはピッタリなんだが…。

「かわいいでしょ？着やすく動きやすいように、ドレス丈は膝くらいにしてもらったんだ」

「ふーん」

そりゃあいいな。確かにこれだと動きやすそう。

でも、それを俺に言っただろう。そんなこと着る人に言えばいいだろ。

…あれ？それなら何で俺に言ったんだ？まさか、俺が？まさか……な。

ポジティブ精神な俺でも嫌な予感がした。

「ちよつと待て。これ、誰が着るんだ？」

ムゼットはきよんとした顔で答えた。

「アズール以外に誰がいるって言うの？」

予感的中。…やっぱり俺か。もしかして馬鹿にされているのか？目の前のかわいらしいドレスを見ているとこんな事を思ってしまったも仕方ない。

フツフツと怒りが込み上げてくる。そんな俺に気づいているのかわいなのか、拍車を掛けるかのようになり、ムゼットは笑顔で俺に着てみてと言った。

「お前、ふざけてんのか？こんな物俺に着させようとして」

こんなふざけたヤツが王家の人間だとは思えない。俺はムゼットを思いつ切り睨んでからドアノブに手をかけた。

「ちよつと待つてよ。何か勘違いしてない？これは君のためなんだ

よ

腕を掴まれて引き止められる。

「何が俺のためだ。ただのテメーの趣味だろ」

俺は掴まれている手を振り払った。

「や…、そうかもしれないけど…。。でもっ」

また腕を掴まれる。今度は、ぐつと掴まれているので振り払えない。

「君の今の姿は女の子。……心は男だけけれど」

そんなこと言われなくても俺が一番わかっている。何が言いたいんだ？

「でも君の今の服装は男。この城の人達や僕は事情を知っているけど、知らない人から見たら不思議に思うだろうね」

うっ……、そういうことかよ。コイツは本当に俺のために…。

「そ、そりゃ悪かったな」

「わかつてくれたならいいよ」

にこつと言われると一層罪悪感が増す。気を紛らわすために、改めてプレゼントされたドレスを見た。

裾にはフリル。袖は膨らんでいる。どうせ着るならもっとシンプルなのがよかった。

ため息をついて近くのソファに座った。ふと目に入ったのはテーブルの上に置いてある髪飾り。手にとってよく見てみると、そのリボンも薄緑色で結び目のところに白い薔薇の飾りが縫い付けられている。

「それ、つけてみる？ドレスとセットで作ってもらったんだ」

道理であるドレスと似ていると思った。

「誰がつけるかっ！」

「ちえっ…。じゃあドレスだけでも合わせてみて」

俺は言われた通り、服の上からドレスをあててサイズ確認をした。寸分の狂いもなく、見事にピッタリだった。

「ピッタリだ…。お前よく俺のサイズわかったな」

「だってこの前の夜に測ったもん。…アズールが寝てる間に、ね」

体中に鳥肌が立った。寝てる間に、誰が部屋に来ても別に何も思わないし感じないけれど…。俺はこの前こいつに犯されかけたのだ。本人曰く、“触診ごっこ”らしいが…。

「大丈夫。男に手を出すほど飢えてないよ」
「じゃあ女だったらどうなってたんだ？なんてことは恐ろしくて聞けなかった。」

王子大搜索

部屋に戻りベッドにダイブ。まったく、ムゼットの相手をしていると疲れる。ブレイブなら別に……。あれ？

そっぴや初めて会った時からほとんどあいつ見かけてないような……。最後に顔を合わせたのは、ここに来て初めて朝ごはんを食べた以来。まったく見ていない。

(あいつ…どうしてんだ?)

心配になった俺は5分も経たない内に再び部屋を後にした。しかし、会いに行くと決めたのはいいが部屋がわからない。仕方がないので適当に部屋を当たってみることにした。

あいつは一応一国を治める王子だし、当然部屋は広い筈だ。だとすれば…扉は大きい。

そんな曖昧な判断で扉の大きな部屋を探した。

「……ここもダメ。ここも何か違う気がする」

家の中で人を一人探すのつてもっと楽なんじゃ…。あつ、ここ家じゃなくて城だ……。今自分がどこに居るかもわからなくなってきた。途方に暮れながら歩いていると、ようやくお目当ての大きな扉を発見。しかも中から声がする。

『おーい』

誰かを呼んでいる。でもこの声はブレイブのものではない。もっと年をとった、お爺さんのような声。

『おーい、誰かおらんかね?』

「は、はいっ」

咄嗟に返事をしてしまった。ブレイブはここには居ない様なのでこの部屋には用はない。しかし返事をしたからには立ち去る訳にはいかない。

(しゃーねえな)

俺は声のする方へと向かった。

王子大搜索（後書き）

また新キャラ登場か…。てか自分でも話の展開の早さに驚き!!

ヘナチヨコ劇場

アズール「もうじきこの話…終わるんじゃないか？」

ムゼット「ええ〜？僕まだあんまり出てないよ〜」

エメルダ「私なんて出演時間、一瞬じゃない!!」

ブレイブ「……。何の騒ぎだ？」

実際のところわかりません（汗）

オチもまだぼんやりとしか浮かんでないし、エメルダいつ出そうかも決まってないし…。30話まで続けば嬉しいですね（^o^）

残ったスキル

部屋に入ったしまった後にノックをすべきだったと思ったが、ため息をつく以外どうしようもなかった。しかしすぐに気を取り直し、辺りを見渡し声の主を探した。けれどそこにあっただのはピアノが1台とソファとローテーブル、それからキャビネットとその上にある水槽だけだった。人なんて一人もいない。聞き違えたのかと思いで部屋を出ようとすると、またさっきのあの声が聞こえた。

『わしの声が聞こえるのか？』

「どこにいる？お前、誰だ？！」

見渡しても声が出そうなものなんてない。音ならピアノとか…？

『違う、違う。そっちじゃない』

そっちじゃないって…。

んなの言われなくてもわかってるし！！大体ピアノが喋る訳ねえじゃん。犬とか猫とかならわかる気もするけど…。さっきテーブルの下を見たが何も居なかったしホコリひとつなかった。とても綺麗に掃除されている。

（ピカピカだ…）

海に住んでいた時、俺の部屋は散らかりっぱなしだった。当時は何も思わなかったけど、今となってはそれがどれ程酷かったかわかる。『おおい、キャビネットの上じゃ』

ぼんやりしてしまっていたが、謎の声によつてはつと我に返った。そしてキャビネットの上を見た……が大きな水槽と魚以外何も見当たらない。

『やっと気がついてくれたか』

声が聞こえると同時に魚の口がパクパクと動くのがわかった。そう、まるで喋っているかのように。

「え……。さ、魚？」

人間は魚の声なんて聞こえない筈。魚と話せるのは魚介類とか人魚

とか…。とにかく海に住む生物だけだ。なのになぜ？

今度は俺が口をパクパクする番だった。

そもそも魚の声って人間にも聞こえるものなのか？いや、それはないな。前何かの本で人間は人間同士しか話せないって書いてたし…。ふと薬を渡した時の魔術師の言葉を思い出した。

“それでも何か不具合があるかもしれないから気をつけてね
これも不具合ということなのか。”

『おい、お前さん。わしの事、“魚”などと言ったな？』

「え…？あ、ああ」

何か問題でもあったか？

『はあ…。わしにも正式名称があるんじゃない』

がっくりと話す魚。おそらく、名前で呼んで欲しかったのだろう。

『わしや“ダトニオ”じゃ』

「ダトニオイデス・プルケール…だろ？シヤムタイガーの」

そこまで言うと、驚きと喜びの声を上げた。

『うおっほっほ…。何じゃ、わかっておるではないか。よくカンボ
ジアタイガーと間違えなかったな』

確かにこの爺さんが言う通り。ダトニオのシヤムタイガーとカンボ
ジアタイガーの区別はかなり難しく、間違えやすいのだ。普通の人
間ならば学者が相当な魚マニアくらいにしかわからないだろう。

「で、シヤムの爺さん。何か用があって呼んだんだろ？」

『おお、そうじゃったの』

あまりの喜びで用事を言うのを忘れていたようだ。おいおい、この
爺さん大丈夫かよ…。

『実は最近な、相棒のアロワナがポックリ逝ってしもつての。話し
相手が居なくなっってしまうたのじゃ』

アロワナにダトニオ…。でかい魚ばかりだな。

『それで誰かわしと会話できる者を探しておったのじゃ』

こんな水槽の中で独りきりじゃ寂しいし、退屈だろう。俺にできる
ことなら何とかしてあげたい。

「よし。いいぜ。俺でよければ引き受ける！」

『本当か?! ありがとうよ。お前さん、名は何と言っくんじゃ?』

「俺、アズール。よろしくな」

爺さんは嬉しそうに水槽内を泳ぎ、そうかい、と頷いた。しばらく泳いでいたが、ピタツと動きを止めて思い出したかのように聞いてきた。

『しかし、なぜ女性が“俺”などと言っのじゃ?』

う……。聞かれると思ってましたよ。でも俺、ブレイブ探している途中だったんだよなあ。

「悪いけど、また今度ってことだ…」

今は説明している場合じゃない。

『ふむ、それもそうじゃの。では、またの。アズールよ』

「おう。またな、爺さん」

残ったスキル（後書き）

魚の事を書きましたけど、魚の事よく知らないんですよ。ダトニオにした理由は、単に大きい魚にしたかっただけです（笑）

プチ鬱ディナー

結局あの後ブレイブを見つuckerる事はできなかった。案の定、その日の夕食にも顔を出さなかったし。メイドに尋ねると、ブレイブは自室で食べているそうだ。

(みんなで食った方が絶対うまいのに…)
よっぽど仕事が忙しいのだろう。

「アズールうゝ、どうしたの？そーんな暗い顔してさ」

「お前は心配じゃないのか？あいつの顔、最近見てないし」

俺が尋ねるとムゼットは、なあんだ、その事が…と呆れたように口を開いた。

「ブレイブはね、この間婚約パーティーしたんだ。そのせいで仕事が溜まつちゃったから今やつてるんだよ。」

多分それが原因で、あの船に乗っていた時のあいつは不機嫌な顔をしていたのだろう。俺も何か手伝ってやろうと思ったが、仕事の事となったらただの邪魔者にしかならないのはすぐに目に見えた。

“船”で思い出したけど、ブレイブの奴、婚約者と全然会ってないみたいだ。ムゼット以外に城への来客は他にいないようだし。俺も早く会いたいなあ…。

「そうそう、アズールのクローゼットに服足しといたよ」

そう言いながらデザートの苺を口に運ぶ。

またコイツは勝手に他人の部屋を…。

「カモフラージュ用の服だから。着る時は好きなの選んで」

はあ……。女物の服って事だな。つか選ぶほどあんのか?!せいぜい2、3着でよくねえか?

「ほらほら、そーんな険しい顔しないで。アズールも食べなよ、苺おいしいよ?」そう言って俺の口に^{へた}苺を取ったばかりの苺を押し込んだ。

「ひゅうになにぶんがっ!!(急に何すんだっ!!)」

俺は母は帯側から食べる派だったのに……。口の中にプチツとした食感……。その後に甘さと程よい酸っぱさが広がる。そのせいでそれ以上はムゼットに文句を言おうとは思わなかった。

「おいしい？」

「ん……。まあ……」

確かにうまかった。ただ、帯側から食べた方がもっとうまかっただろうと思った。

ブレイブの過去

城の生活にも慣れ、やっと誰の部屋がどこにあるのかもなんとなく把握できてきた。それでも、やっぱりまだ迷う訳で…。自分の部屋がどこだったかわからなくなってしまった。扉はどれも同じ様に見える。見た感じじゃわからない。ここに住みはじめてから、自分が実は方向音痴なのでは…と思えてきた。

途方に暮れて当てもなく歩いていると、ドンツと誰かにぶつかった。「あ、すいません」

俺とした事が。ちゃんと前見て歩いていたのに。

「こちらこそすまない…って、アズール？」

「え？」

不意に名を呼ばれ、顔を上げると目の前に立っていたのはブレイブ。会うのはしばらくぶりだった。

「お前、もう仕事はいいのか？」

「ああ。全て片付けたが…。そんな事より、ここで何してるんだ？そつだ！コイツに聞けば俺の部屋がどこにあるかわかるはずだ。」

「俺の部屋どこかわかんなくなっちゃって…。ここってどこなんだ？」

「ここは俺の部屋の前だが？お前の部屋はこの真下だ」

しまった、階間違えた…。何かブレイブには毎回まめげなところを見られているような…。

「よかつたら寄ってかないか？」

「は？」

ブレイブは親指を立て部屋をクイツと指した。

「お前には色々聞きたい事がある」

聞きたい事って何だろ？スリーサイズとか？

……ありえねえな。

「遠慮なんてするな。ほら、入れよ」

扉の前でまごついていた俺は、やや強引に部屋に入れられた。

中に入ると香ばしい匂いがした。匂いの元はブレイブのデスクの上のカップから。中には黒色の液体が入っていて湯気が上がっている。「お前もコーヒー飲むか？」

なるほど、これはコーヒーという飲み物か。いい匂いするし…ちよつと飲んでみようかな。

「おいっ、それは俺の…」

「んなケチくさい事言うなよ。一口だけ…」

ゴクツと勢いよく飲んだのが間違いだった。

「あつっあつっあつっ！……うええ〜。苦…」

味を確かめる前に熱さが広がり、その後をやつてくる苦さ。こんなによく飲めるな。飲み物であることを疑いたくなる味だ。

「もしかして、コーヒー初めてだったのか？」

先程の熱さによってダメージを受けた口を押さえながらコクコクと頷く。紅茶なら甘くておいしいけど、これはただの苦い汁だ。

「それならいきなりエスプレッソはキツいだろ？」

フツと笑って言うが、コーヒーという飲み物を初めて知った俺には何を言っているのかわからない。そもそもコーヒーには種類があるものなのか？

とにかく、これは匂いだけで十分だ。もう何があっても絶対に飲まないぞ！

「…それより聞きたい事って何だよ？」

話を逸らすために話題を変える。するとさつきまで笑っていたブレイブがやけに真剣なものになった。

「アズール、お前は何であんな所に居たんだ？」

「だからそれは部屋を探して迷って…」

「さつきの事じゃない。俺と会った時の事だ！」

それだけは言えない。人魚は、その存在を人間に晒してはいけないうという掟があるから。

人間の間では、人魚の肉を食べると寿命が延びると言い伝えられて

いるそう。そのためたくさんの人魚が捕まえられ、殺されたらしい。俺が生まれる前にほとぼりはさめたらしいが……。聞いただけなのではつきりとはわからないけど、そのせいで今でも人間は人魚の世界では嫌われ者だ。だから掟を破った者は海を追放される。俺が今人間として生きていることも、もしかしたら掟を破っているかもしれない。

ブレイブが俺の正体を知っても、殺したり、食べたりしないと信じていない訳ではない。ただ、もし、今追放されたとしたら……。もし、恋が叶わなかったら……。

……帰る所がなくなっちゃう。

「俺に言えないのか？」

先程よりも優しい口調だったが、俺には黙って頷くことしかできなかった。よくよく考えてみれば、俺は自分自身の事を何も話していない。それなのにブレイブは俺をここに置いていてくれる。

「お前の親が心配しているのでは　　と思つてな」

ブレイブはぼつりと呟いた。その時の顔はなぜか悲しそうに見えた。「俺、もう家には帰れねえんだ。これも特別な薬と関係してるんだけど……」

俺が言えるのはここまでだった。

「そうか……。無理に聞こうとして悪かったな」

眉尻を下げてもらったよさは下がらない。うらやましいぜ……。そついやコイツの親って見かけないな。

「前から思つてただけだし、お前の親ってどこに居るんだ？」

「もう居ない」

「……え？」

ブレイブの言った言葉が信じられなかった。

「12年前に死んだ。もうこの世には居ない」

そんな、そんな……。親がもう居ないなんて……。なのに何でコイツはこんな涼しい顔をしていられるんだ？何……で……？

「おいおい、何もお前が泣く事じゃないだろ？それも何年も前の事

で…」

ブレイブは驚いているけどそれ以上に俺が驚いている。

(俺が、泣いてる?)

頬に暖かな雫が流れ落ちるのがわかった。視界もぼやけて窓の外の夕日が霞む。そこでやっと泣いてる事に気がつく。

「だっ…だつて、うぐっ…お前があっ…ひぐっうう…ぐすっ」

涙声でうまく喋られない。それでもブレイブには言いたかった事は伝わったようで。ブレイブは今まで見た事ないくらい優しい顔をしていた。

ドクンと胸が波打った。

そして、ぼんぼんとまるで子どもをあやすかのように頭を撫でた。

「俺だつて泣きたくなる時もある」

沈みかけた夕日に照らされたその表情は、どこか哀愁を感じた。もうすぐで日は沈む。

気分は落ち着き、先程まで濡れていた頬はもう乾いていた。

ドクン、ドクン。

心臓の音がうるさい。ブレイブにまで聞こえてしまいそうだ。

俺の身体が女から元の男の姿へと戻る。さっきからの激しい心拍数の原因は多分これだ。

窓の外を見ると日は沈んでいた。

「戻ったのか?」

「ああ」

髪も元の長さへと戻ってすっきりした。今も胸がざわざわするけど、きつとさっきの余韻が残ってるのだろう。

「じゃあ、またな」

少し長居しすぎたか?けどブレイブが誘ったんだし…いいよな。

「もう迷子にはなるなよ?」

にやりと笑って湯気の立ちきったコーヒートを飲んだ。

「心配無用だ!」

ボタンと荒々しく扉を閉めてやった。皮肉まで言われたからには、

もう絶対迷子にはなんねえよ！

……って、あれ？

帰り道、どっちだっけ……？

ブレイブの過去（後書き）

今回は何かシリアスっぽくなってしまいました…。

素朴な疑問

王様が死んだら王子が王様になるんでしょうか？

…どちらにせよ、ブレイブは王子。王様とは認めません おい

ティータイム1(前書き)

プレイブ視点です。

ティータイム1

「ふう……」

今で何度目のため息だろう。今日は何かと来客が多い。

この辺りで有名な貴族の者や、両親の友人だった者などがまとめて来たのだ。今日は特別な日でも何でも無い。そうこうしている間にもまた客が……。

「忙しかったかしら？ごめんなさい」

「いえ、大丈夫です」

この方は確か……。

「先日は家の息子がお世話になったそうね。ありがとう。私達が旅行に行つてたからかしら……」

俺の叔母……ムゼットの母親だ。夫婦揃つて2人だけで旅行に行つていたらしい。2人きりの時間を邪魔しないようにとムゼットは自ら身を引いたのだろう。

あいつも気を使つてここに泊まりに来た事くらいはわかっている。

自分達のいない間、使用人達に休暇を与えるためだ。どうせなら俺にも気を使つてほしかったが……な。

旅行の土産話や世間話など、しばらく他愛のない話をしていたが

「あら！また話すぎたわね。これ、大した物じゃないけどお土産ね」

そう言つて土産を俺に持たせた。

「わざわざありがとうございます」

こういう行為は断らない方がいいな。

「それじゃあね。何か困つた事があつたらいつでも頼つてちょうだい」

パタンと扉の閉まる音と共にまた静寂が訪れる。テーブルに置かれた土産が甘い香りを放つ。確認しなくても中身がお菓子だということ

とはわかった。疲れていたこともあつてか、無性に目の前の菓子を食べたくなった。執事呼び、ティータイムの準備をするように命じた。

（そうだ、あいつを誘おう）

ふと脳裏にアズールの顔が浮かんだ。

ティータイム1（後書き）

4連休だから次話upができるだけ早くできるよう、頑張ってみようと思います（´、`、ゞ

お誘い

(久しぶりにダトニオ爺さんの所に行ってみるか)

あの日、勘を頼りに通った道を再び歩く。

この辺の廊下には俺ただ一人だけしかいないくらい静寂で、ダトニオ爺さんの存在が忘れられている気がした。

部屋の前に立っただけれど中からは物音一つしない。

「爺さん…？入るな」

中に入っても相変わらず静かなまま。部屋を間違えたかと思ったけど、水槽と魚……ダトニオがいたので間違いなさそうだ。

「おい。じーさん、じーさんっ！！」

「んお…アズールか？！よく来てくれたの」

ぼーっとしていたみたいだったけど大丈夫なのか？今もぼんやりしてるっていうか…。

「久しぶりだな。何か元気なさそうに見えるけど…」

前会った時に元気がありすぎたせいかな、その差は歴然としていた。

「少し物思いにふけていてな…」

「物思い？」

俺は小首を傾げ、続く言葉を待った。

「そこにピアノが置いてあるじゃろ？」

爺さんが言う通り。部屋には一台の立派なグランドピアノが置かれている。

『わしはその音色が好きじゃった。いつもこの中から聞いていた。じゃが…』

急に黙りこくってしまった。一体どうしたと言うのか？

「何なんだよ？」

ダトニオ爺さんは辛そうにため息をつくばかり。

「なあっ…！」

しばらくの沈黙が続いた。その間中、ダトニオ爺さんの目をじつと

見つめていた。ダト二才爺さんは困ったようにしていたが、俺はいつまで経ってもその場を離れなかった。そんな俺を見かねたのか呆れたのか、大きなため息をついた後、ようやく重い口を開いて話してくれた。

「あやつは死んでもうた…。もう12年も前の事じゃ」

「それって……」

12年前…。心当たりのある数字。

「フィグリーナは嵐の夜に死んだのじゃ。このピアノはそれ以来、誰にも演奏される事なく眠りっぱなしじゃ」

フィグリーナ…？女の名前…だよな。

「その人って誰なんだ？」

聞き覚えのない名前だ。

「お前さんそんな事も知らぬのか?! 呆れたもんじゃ…」

そんなに有名人なのか…。でも俺はこの城の昔を知らない。過去に誰が城に住んで居たかという事も、何が起こったかという事も。『

フィグリーナはかつて、この城の王妃じゃったのじゃ』

お、王妃…？王妃って国王の妻だよな。つまり…。

「ブレイブのお母さん?!」

「そうじゃ、そうじゃ。たしか息子はブレイブとかいう名前じゃったのお。今思い出したわい」

いやいや、普通忘れねえだろ!!

つてか、魚にまで死を悲しまれる人だ。ブレイブの母親はきつととてもいい人だっただろうに。そう思うと辛そうにしていたあいつの顔、今でも忘れられない。

「　　」

「その歌は…どこかで聞いたことが……」

「え？」

湿っぽい話になってしまったので気晴らしにと鼻歌を歌ってみたんだけど…。何で爺さんがこの歌を知ってるんだ？これは俺が小さい頃によく母さんが子守歌として歌ってくれた、俺の大好きな歌。人

間界でも歌われているものなんだろうか？

「まさかとは思いが……いや、その歌を知ってるんじゃ。間違いない」

「な、何だよ？」

「アズールよ、違うなら違うとはっきり言ってくれ」
声が固く真剣なものに変わる。

「お前さん、人魚じゃな？」

「えっ……」

何で…、何でわかったんだ？俺何にも言っただけなのに。この爺さんエスパーか？！

「やはりそうなんじゃな？最初からおかしいと思っただわい。ただの人間にわしら魚類の声が聞こえるなんてな…。それに、魚のみ知られている歌を知ってるんじゃ。ピンときたわい」

年の功ってヤツか。爺さんになるまで生きていると、いろいろと知識が豊富になるもんだな。

「でもよ、その歌…友達とかは知らなかったぜ？」

人魚の時、俺の数少ない友達は誰ひとりこの歌を知らなかった。みんな首を横に振って、聞いたことがないと言っていた。

「当たり前じゃ。そう広く知られていない歌じゃからな」

じゃあ何で母さんは知ってたんだ？母さんの友達に物知りとかいなかったと思うし。

「それよりもやけに落ち着いているんだな。人魚から人間になった奴が目の前に居るっていうのに」

さっきからずっと同じ調子で話すダト二オ。冷静沈着すぎる。

「大方人間に恋したとかで人間になったんじゃろ？若いと何でもできるからつらやましいのお…」

す、鋭い…。何でもお見通しだな。隠し事とかしてても、見抜きそうなくらいだ。爺さんだからといって侮れない。

「爺さん、その事なんだけど…。内緒にしててくれっ！」
両手をぱんつと合わせ、頭を下げる。

この事だけは黙っててもらわないと本っ当に困る。

『わかっるとる、わかっるとる。墓場まで持って行くから安心せい!! 第一、わしの声はお前以外の人間には聞こえんしの』

がははとダトニオが笑った時、ガチャツと急に部屋の戸が開いた。扉が少し開いただけで、隙間から覗く黒髪と背の高い体格が確認できた。

「ぶっ、ブレイブ?!」

「アズール!こんな所に居たのか」

安堵の息を吐くブレイブ。でも俺は、さっきの会話が聞こえていたのでは…と気が気でなかった。

「話し声が聞こえたから誰かと一緒かと思っただが…」

(そうか。こいつには魚の声は聞こえないんだ)

「いやあ、そのお……。独り言、独り言」

ブレイブはふに落ちないという風だったけれど、すぐに気を取り直したみたい。

何か急ぎの用件があっただけかもしれないけど…。

「アズール、その…今暇か？」

「ああ。暇…だけど？」

爺さんと話してただけだしな。

「よかつたら茶でも飲まないか?いい茶菓子が手に入ったんだ」

茶菓子…、菓子…、お菓子…。

…お菓子?!

「飲む、飲む!」

お菓子を釣られて、つい飲むと答えてしまった。

言ってしまったから、あっと思ひ爺さんを見た。

『行って来い』

優しく言ってくれた。

俺はブレイブに見えないように、親指を上突き立てて爺さんに向かってピツと前に出した。

(サンキュー、爺さん)

『ほっほっほ』

爺さんの笑い声を聞いて部屋を後にした。

テイクタイム2(前書き)

プレイブ視点です。

ティータイム2

なんとかアズールを誘うことができた。

客間に入ると甘い菓子のに包まれた。俺達が来たことを確認した執事がカップに紅茶を注ぐ。

柑橘系の香りがふわっと広がった。

(アールグレイ…か)

甘い物を食べるにはちょうどいい。

「ありがとう。もう下がっていいぞ」

頭を下げた執事は静かに退室した。

テーブルには先程淹れたばかりのアールグレイと、等分に切り分けられたお土産　ズコットが皿に盛られ並べられていた。ナッツやチョコチップ入りのクリームのおかげで、切り分けた時の美しさが一層増した。

しかし、甘い物はあまり好きではない俺にとってはこれを食べると考えただけで胸やけしそうなのに、アズールは目をきらきら輝かせてズコットを見つめていた。

とりあえずアズールを座らせようと思い、椅子を引いてやり、座れという合図を送った。アズールはムツとした様子で椅子に身を委ねた。しかしテーブルに目を移すとまた嬉しそうな顔をしていた。

けれど座ってから、いつまで経ってもズコットに手をつけなかった。

「食べないのか？もしかしてズコット…嫌いか？」

俺と同じく甘い物が苦手だったのだろうか？

アズールは首をぶんぶんと横に振り、否定の意を示した。

「だってお前が食べないから…。食っていいのか？」

どうやら俺が食べるのを待っていたようだ。

何だかアズールが、目の前にある餌を待てと言われた犬のように見えた。フツと笑うとまた怒ったような顔をした。

「何笑ってんだよ？甘い物好きで悪かったな」

「甘い物、好きなのか？」

しまったという風に口を押さえていたが、俺の耳にはもうすっかり届いている訳で。ふん…と乱暴にフォークを刺し、口へとアイスケーキを運ぶ。

「あつ…これ、うまい」

途端に頬が綻ぶ。俺もケーキを口に運んだ。

(甘い…)

たっぷりのクリームは甘い物好きには堪らないだろう。

気がつくのと、アズールの口にはクリームが。

「口にクリームが付いてるぞ」

「どこだよ？」

尋ねる彼に、ここだと自分の口に手を使って指し示す。

「んっ…と。サンキュー」

ペロツと舌で舐めるその仕草は妖艶なものだった。きっと無意識でやっているであろうが、俺の理性の糸に振動が伝わり揺れ動く。

「でも…」

「ん？」

「ムゼットにも食べさせてやりたいな」

その言葉を聞いたらなぜか憤りを感じた。

(何でここであいつの名前が…)

「あいつは家に帰った」

「そっか…」

残念そうに肩を竦めるアズール。

「そんなに…あいつが気になるか？」

「え？」

言葉を聞いて、不思議そうに目をぱちくりするアズール。よく聞かえてなかったみたいなので、慌ててごまかした。

「い、いや…何でもない」

何言ってるんだ、俺は…。

「ブレイブは食わねえのか？」

俺の一口しか減っていないズコットを見て言う。言ってくれるのはありがたいが、このクリームの量だ。食べ切るには相当な気力を要するだろう。

「甘い物は苦手だな…」

アズールはふーん、とうそぶき、思いついたように言った。

「んじゃあ、半分食ってやるよ」

（おいおい、まだ食べるのか…？）

フォークで俺の分のケーキを半分に切り分けた。

すでにアズールの皿は空になっており、新しく俺の半分に切ったケーキをぱくついているところだった。

あれを1切れ食べたのに更に食べるなんて胸やけしないのか。

「あゝ、うまかった」

綺麗に平らげてしまった。痩せの大食いとはこういう奴の事を指すのか。

俺も再びフォークを進める。

…やっぱり甘かった。

でも、こいつと一緒に食べると不思議とうまく感じる。

「なーんだ。うまそうに食ってるじゃねえか」

そんな事はないはず。ただ、今はおいしく感じただけだ。

「なぜそう思う？」

「だって、さっきも今も笑ってたからさ」

そうか……。俺は笑っていたのか。

けれど、俺は一体何が楽しくて笑っていたのか。何がおもしろくてそんな顔をしたのか。

考えても考えても今の俺には答えが全く見出だせなかった。

ティータイム2 (後書き)

本当はロールケーキにしようと思ってたんですけど、何かもつと貴族が食べるぞってヤツがよかつたんです。んでその結果がズコツト。

アイスクーキと言っても、スポンジ生地の中に柔らかいアイスが入ってるものらしいです。よく知りません。

勘違いカップル1（前書き）

「ブレイブったら私の所へ来るって言ったのに……」

あのパーティーから4ヶ月。その間に彼は一度も私の元へ訪れていない。手紙の一つだってくれない。

「私、見放されちゃったかしら……」

いいえ、ブレイブに限ってそんなことするはずない。きっと何か事情があったのよ。

「すみません。もう少し急いでいただけませんかしら？」

馬車を走らせる執事に呼びかける。執事は、はいやっと呼び、馬をより一層速く走らせた。

勘違いカップル1

今日は朝から何やらバタバタと騒がしい。どうしたのかと思いメイドに尋ねると、大事な客が来るとのこと。メイド達は花瓶の花を色鮮やかなものに入れ替えたり、すでにピカピカの窓を更に念を入れて拭いたり、ゴミ一つ落ちていない床を掃いたりとても忙しそうに動いていた。

「おっはよ、アズール」

「ああ、おはよ……ってムゼット!？」

何でここに居るんだ?家に帰ったんじゃないのか?

「もしかして……、大事な客ってお前の事か？」

こいつの場合“だいじな客”というよりも、“おおごとな客”だと思っただけだな。

「ん?……ああ、違う違う。僕もその人に会いに来たんだからね」

そんな会話をしている内に、部屋の外がさっきよりも増して騒がしくなった。

「ブレイブー!ブレイブーっ!!」

女の声だ。ひょっとして、この声の主が大事な客なのか?

「おっかしいな。予定よりも3時間早いじゃん。……って、やばっ」

何が……と言おうとした、“な”のところで部屋に押し込められた。

「急に何すんだよ?危ねーな……」

もう少し強く押されていたら危うく転ぶところだった。しかしムゼットは真剣な表情で言った。

「アズール、早くドレス着なきゃ!」

「何で今……。あっ……!」

そうか!!俺が男の格好していたら変に思われるから。でもこれを着るのはちょっと……。

「ほらほら。早く、早く!!」

今は躊躇とまどっている場合ではない。

「わかつてるよ！……あれ？あれ？この服どうなってんだ？？」

「何やってんの？！早くしないと……。ほら、ここをこうして……」

ぎこちない手の動きだった。手が伝わってくれて、なんとか半分くらいまで着ることができた。

その時、また外から声が……。

「その声は……ムゼット？さてはまたあの部屋に泊まってるのね？さっきよりも声が近くなった。おまけに足音までこちらに向かっている。ドレスはまだ着れていない。あと30秒あれば間に合ったのに……」

「とりあえず隠れて……」

と言ったと同時に俺の体はベッドへと押されていた。倒れそうになって反射的に動いた手が、ムゼットの服を掴み一緒にベッドへ倒れ込む。

その時にちょうど扉が開いた。

「ねえ、ムゼット。ブレイブはどこに居……」

「ああ」

俺とムゼットの声が綺麗に八もった。

隠れるための布団を被っていないので、俺の姿は丸見えだ。それに今、体は仰向けになっており、ムゼットは俺にまたがるように四つん這いになっている状態。ちなみに俺はドレスをちゃんと着れていない。

「あら？邪魔しちゃったみたいね……。ごめんなさい」
パタン。

一瞬の沈黙の場に扉の閉まる音が響く。顔を見合わせた俺達は一目散に部屋から飛び出した。

「ちょ、ちよつと待って。早とちりしないでください」

「そうだよ、エメルダ。勘違いだよ。勘違い」

必死の状況説明も虚しく、まったく通じていない。

「やっとムゼットにも恋人ができたのね」

「え……、あの〜……」

話がどんどん進んでいつちゃってるし。ってかこの娘、あの船に乗ってたかわいい娘ちゃんじゃん！

「あなた、お名前は何とおっしゃるの？」

「えと…アズールです」

「そう、いいお名前ね。私はエメルダ。ムゼットの幼なじみでブレイブとは婚約しているの。ムゼットは少し子どもっぽい所があるけれど、心はしっかりしてるからよろしくね」

「は、はあ」

まずいぞ。完璧にムゼットの恋人っていう位に見られている。誰か違うと言ってくれ〜。

勘違いカップル1 (後書き)

ハイペースアップでストーリーめちゃくちゃになってることに今頃気がつきました(^ー^ ;)

早けりゃいってもんじゃないんですね。

私の場合、どんなに推敲してもおもしろくはないけれど(^ q
^) /

勘違いカップル2 (前書き)

遅くなりましたm(´`´) m

勘違いカップル2

何でこうなったんだろう。どうしたらこんな展開になるんだ？目の前にはにこにここと微笑むエメルダちゃんと必死に誤解を解こうとしているムゼット。

そこへやって来たのがブレイブだった。

「朝から一体何を騒がしくしているんだ？」

「ブレイブ……！！」

ようやくお目当ての人を見つけて駆け寄るエメルダちゃん。いつかその立場は絶対にこの俺が奪ってやるぜ。

「……エメルダ？随分と早かったんだな」

「早く着いちゃダメだったかしら？」

首を傾げ尋ねる。

くう〜っ！！かわいい。あーっ、エル・オー・ブイ・イー！！

「それより、あのパーティーの時に約束した事、忘れたの？」

「約束？」

何の事だ、という風に片眉を上げるブレイブ。それを聞いてエメルダちゃんは機嫌を悪くしたらしい。

「もう！私の家に来るって言ったじゃない。私、その便りが来るのをずっと、ずーっと待っていたのよ？」

「落ち着け、エメルダ……」

癩癩かんしゃくを起こしたエメルダちゃんをなんとか宥めようとする……が焼け石に水の状態。

「何が落ち着け、よ。約束を破ったくせに……」

でも確かに、今の話だと明らかにブレイブが悪いと思うけど。でもあいつもあいつで仕事を立て込んでたみたいだし。うーん……。どっちが悪いかなんて言いようがないけど、世の中には「レディーファースト」という言葉があるし……。

「俺が悪かった。だからそんなに怒るな」

あのブレイブが謝ったー…！さすがに婚約者には敵わないってことか。

「本当にそう思ってるの？」

「ああ、思っている」

「本当の本当に？」

「本当の本当だ」

「なら、許してあげるわ」

やっと落ち着きを取り戻したようだ。また笑顔を浮かべたエメルダちゃんはこちらに歩み寄って来た。

「お見苦しい所をお見せしてしまつてごめんなさい」

「いえ、大丈夫です！」

エメルダちゃんを間近で見た俺は、婚約者であるブレイブの前だというのにデレデレとしてしまう。

「あなたも、彼が約束を破つたらこんな風になつちゃうかもしれないわよ？」

それを聞いたブレイブは眉間に皺を寄せた。

「どういう意味だ？」「あら、知らないの？ムゼットとアズールさんつてお付き合ひしていらつしやるのよ」

鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしている。ブレイブは勢いよくこつちを向いた。俺は高速で首を横に振つてさっきの言葉を否定しまくつた。

次にムゼットの方を見た…というよりも睨みつけた。

「前々からお前の女遊びが激しいと思つていたが…」

「違うっ！ちーがーうっつて！！」

全力で否定し、ブレイブの耳元でコソコソと事情を説明している。

「……という事だから、違うの。わかつた？」

状況を理解したブレイブが、ホツと胸を撫で下ろしたように見えたのは気のせい？

「あいつらは付き合っていない。弁を弄弄するのはやめろ」「そつだつたの。私、早とちりしちゃつたのね」

ブレイブの言葉だと一発で信用するのか！確かに信憑性はあるけどさ…。

やっぱり好きだから信じられるって事か。

「それより、何でまたこの中途半端の時期に来たんだ？」

今は梅雨でじめじめシーズンの真っ只中だ。

エメルダちゃんの顔から笑顔が消え、俯き加減でこう切り出した。

「お父様と…喧嘩したの」

さっきよりも1トーン低くなった声。

「だってお父様ったら、私の事をいつまでも子ども扱いして…」

単に、娘を嫁にやるのが寂しいだけなんじゃないかと思うんだけど…。

…。

「だから、しばらくここに泊まることにしたの」

うひょーっ！ここに泊まるのか？！やったぜい！！

俺の心の中はお祭り状態。だけどブレイブはそんな俺とは裏腹に、

怖い顔をしていた。

「……帰れ」

とても低く怒りが混じった声。

「え？」

「帰れ、と言ってるんだ」

こんなに怖いブレイブは見たことがない。

「ちょっと、そんな言い方はないんじゃない？エメルダは婚約者じゃないん

やん」

ムゼットの言う通りだ。婚約者にはもつと優しく言葉を選んで言う

べき。

「婚約者だろうと関係ない」

そう短く言い放った。

「そ…んな。ひつう、ひどいわ。私…っ」

エメルダちゃんの瞳は涙で濡れていた。それに気がついたブレイブ

はう…っとうろたえた。

少し朱く色づいた頬に、とめどなく流れる涙。ブレイブがどんな言

葉をかけようともしき止まない。「これは「泊まれ」と言つまで泣き止まないだろう。

ブレイブは大きくため息をついた。

「……一日だけだぞ」

どうやら涙には弱いらしい。エメルダちゃんは今夜、ここに泊まることになった。

新たなライバル？（前書き）

長い間お休みしてすみませんでしたm（
—
—
）m

新たなるライバル？

エメルダちゃんが今日、ここに泊まる……そう思っただけで俺の心はときめいた。知らず知らずの内に頬が緩む。

「アズール、鼻の下伸びてる」

おっ……と。こんなみつともない所を彼女には見せられない。もっとシャキツとしろ、自分！ここでヘマをするとせつかくこの時まで待った今までの時間と苦労が全部水の泡になってしまう。

「アズールもエメルダ好きなんだ？」

「ああ。でも、ブレイブ以外は眼中にないみたいだな」

どんなに遠くから見ても、誰が見ようともしんな事はすぐにわかった。今でも、ほら……目がハートマークだ。

「お前はどんなんだよ？」

たとえ幼なじみでも、あんな娘がいたら一度くらい好きになったり、気になったりするだろう。

冗談半分で聞いてみた。

「べっ、別に。ばばば、ばっかじゃない？従兄弟の婚約者を好きになる訳ないじゃん！」

……怪しい。今の否定の仕方、こいつらしくない。そしてこの焦り様……、何か引つ掛かる。ムキになってる辺りが特に気にかかる。

よし。ちよつと試してみるか……。

「じゃあ、俺の事は？」

自分自身の言葉に全身から鳥肌がたつたけど我慢、我慢……。

「ん？好きだよ。やらせてくれたらもっと好きになっちゃうけど」予想はしていたけど……、はあ……。

呆れて物も言えない。こいつはいつでも盛ってんのか……！

……いや、今はそんな事よりも確かめる方が重要だ。

「じゃ、エメルダちゃん……しつこいな！好きじゃないって言うてるだろ……！」

うーん…、気のせいだったのか？今でもちよつと引つ掛かるんだけど…。かと言って、これ以上ムゼットに何を尋ねても埒が明きそうにないし。仮に、ムゼットまでエメルダちゃんの事が好きだったとしたら、ますます恋のライバルが増えるだけだ。

（言いたくない事を無理に言わせるのも気が引けるしな）
そんな考えから俺はそれ以上追及するのはやめた。

疑念（前書き）

遅くなつてすいませんm（
|
|
）m

エメルダ視点です。

疑念

ブレイブには、ここに来たのはお父様と喧嘩した…と言ったけれどそれはただの口実。本当の目的はブレイブの様子を確認するため。こんなことしたくはなかったけれど、こうでもしないと不安で不安で夜も眠れないから。

「ブレイブっ!!」

ぎゅっと後ろから抱きしめると

「どうしたんだ？」

そう優しい声音で抱きしめ返してくれる。けれどそんな甘いひとはつかの間…。ブレイブは私の肩を掴み押し離れた。

「悪い。仕事が残ってるんだ」

そうやっていつもあなたは私を突き放す。仕事が忙しいのはわかっている。小さい頃に親を失ったあなたは今でこの国の重責を果たしてきたんですもの。

私のお父様も、小さいながらに一國を治める王。とても忙しそうに執務をし、疲れきった背中は今でもたまに見る事がある。

でも…私だって女。愛する人に突き放されたら悲しい。側に居ないと寂しい。

「悪いな」

ふわっと優しく頭を撫でられた。

どうして？今までこんな事しなかったじゃない。どうして急に…。

「変わったわね…」

そうよ。あなたは変わった。優しくなった。それに…笑顔が増えた。

「どこがだ？」

あなたは気づいてないみたいだけど。

「いいえ、何でもないの。ごめんなさい。お仕事、頑張っつてね」

話したい事はまだまだたくさんあった。だけど今から仕事をするんじゃない迷惑になってしまう。

なぜ心が重くなったけれど、きっと気のせい……よね。

ガールズトーク

昼ごはんが終わって、部屋で休憩を取っているとノック音。

「どござ」

入って来たのはエメルダちゃんだった。

「やばい。胸の高鳴りが……。緊張する〜」

「ご、ごごご……ごきげんよう。どのようなごよう、ご用件で……おいでにはなはったのでご、ごさいましようか……?」

ああ、緊張しすぎて言葉がめちゃくちゃになっちゃった。きっと呆れられただろうなあ……。

「ふふふ、おもしろい方ね。アズールさんって」

好感度Up! 変な奴だって思われなくてよかった〜。

「用ってほどじゃないんだけど……。少しお話ししません? あなたの事、もっと知りたいし。……お忙しかったかしら?」

俺の事、もっと知りたい……だと? お、思ったたより展開が早いな……。

「俺……じゃなかった。わ、わたしもエメルダちゃんの事、いっぱい知りたいです!」

「それならよかったわ」

危なかった。つい、いつも通りに“俺”って言うところだった。

「アズールさんのご趣味って何ですか?」

「えっ? 趣味、ですか?」

趣味か……。そういえば、今まであんまり考えた事なかったかな。

「歌を、歌うこと……かな?」

これくらいしか思いつかない。今度何か他の趣味見つけとこ。

「まあ、歌をお歌いに? 素敵ですわね」

あつ、満更でもなかったみたい。

「私はバイオリンを弾くことですね。小さい頃からずっと習っているの」

「へえ……、すごいです……!」

バイオリンって気品溢れるよなあ。でも何か堅苦しそう。それを今まで続けるなんてすごい。

「アズールさんって淡泊な方ね。あなたのような女性は初めてだよ。いや、女性じゃないんだけど…。まあ、いいや。夜になったらわかるしな。」

「あの、どういう意味ですか？」

「今まで私の前には気取った方しかいなかったの。私の事をちゃん付けて呼んだのもあなたが初めて」

今の話を聞いていると、お姫様の生活も楽しじゃないようだ。それに、女の子っておしとやかで控えめな娘ばかりじゃないんだって事もわかった。

それからしばらく会話して、話題はブレイブの事になった。

「最近、ブレイブに何かあったかしら？」

さっきまでにこやかに話していたエメルダちゃんはどこへやら。真剣な顔をして、ため息をついていた。

「エメルダちゃんは婚約者ですよ？ブレイブの事を一番知っているのはエメルダちゃんだと思う」

「そう…なんですけれど…。会わない内にどこか感じが変わってしまったから」

ブレイブが変わった？一体どこが変わったと言っただろうか。

「穏やかになっただってというか、優しくなっただってというか…。笑顔が増えたのよ。」

「いい変化じゃないですか」

「ええ。でも、どうして急にそうなったのか知りたくて…。もしかして他に誰か……」

エメルダちゃんは今にも泣きそうだ。俺が今男の姿だったら、抱きしめてあげたい。あいつなんかやめて俺にしるよ…って言いたい。今の俺がそれをやると、ゆ、百合…的な事になっちゃうからやらないけど。

「ちょっと散歩でもしませんか？」

外の空気を吸えばきつと気分は晴れるはず。連日雨続きだった空も、今日は青さを取り戻していた。

「そうですね」

エメルダちゃんはにっこり微笑んだ。

秘密（前書き）

かなり遅くなってしまいました（
）（
） m

秘密

さあつと潮風が肌をなでる。

「気持ちいいですね」

エメルダちゃんを海岸にまで誘ったけど、これってまさか……。

デート……？

うわゝ、どうしよう？は、初めてなんだけど……。手とか握った方がいいのかな？うあー、手汗かいてきた……。

「そういえば、来月はどうなさるんですの？」

来月……？

「何かあるんですか？」

「ブレイブの誕生日の事よ」

ブレイブの……誕生日？

「プレゼント、何にするかまだ決まってるじゃないんですの……」

そりゃあ一大事だ！！……って、俺も何か用意しなくちゃいけないよな。

俺だったら何を貰っても喜ぶけどな。

そもそも、あいつが好きなモノって何なんだ？あいつが貰って喜ぶモノって……。

両親の愛情……？でも、そんなの用意できる訳ない。何か他に……。あいつの父さんか母さんに関係した事なら絶対喜ぶはず。けど、そんなモノあんのか？

(あつ……)

誰にも演奏されなくなったピアノ。ダトニオが好きだと言った……ブレイブの母さんが弾いていた曲。

考えに考えた末に出た一つの贈り物。

「それって“モノ”じゃないとダメなんですか？」

もしかしたらその曲、ブレイブも知っているかもしれない。

「どういう事？」

「ブレイブの母さんがよくピアノで弾いていた曲を知ってますか？」
「ええ、知っていますわ。あれはブレイブが好きな曲ですもの」
「やっぱり…。」

「その曲をバイオリンで演奏してプレゼントしたらどうですか？」
「まあ、なんていい考え！」
「うんうん、俺も我ながらいい考えだと思う。」

「私がバイオリン演奏をしてアズールさんが歌ってくだされば…」
「えっ?!ちよっ…」

何でそんな話になったんだ?歌うのは好きだけど聞いたことのない歌なんてさすがに歌えない。

「それまで一緒に練習しましょうね」

「一緒に…?一緒にっつて…。俺の脳内でイロイロな妄想が…」
「はい!」

これは仲良くなる絶好のチャンスだ!

「それじゃあ、私、そろそろ戻りますわね」

じゃ、一緒に…と言おうとしたけど、なぜか後ろから嫌な視線を感じる。

た、多分、緊張しすぎて感覚機能が敏感になってるんだ。とりあえず振り向いて誰もいないことだけを確認しよう。そしたら帰ろう。俺はそろりと後ろを見た。ニヤニヤと嫌な笑い顔のあいつがいる。俺は前に向き直って歩きだそうとした。

「無視ですか?」

ここで応対したらダメだ。無視し続けるんだ。

「ひっど〜い」

無視無視無視。キモいけど無視。

「…さっきの、彼女ですか?」

「えっ!?!そ、そういう風に見えたか?」

「仲がいい、お友達のように見えました」

「だったら始めからそう言え!!!あっ…」

またこいつと会話している。何でこうなるんだ…。

「実はアナタに報告：と言うより警告がありました…」
警告？もしかして俺、一生男に戻れないとか？そんなのは絶対嫌だ。

「アナタは人魚に戻ったらどうするつもりですか？」

「どうするもこうするも、人間の生活は楽しい。まず人魚に戻ろうとは思わない。女の姿っていうのが問題点だけだ。」

「戻らねえよ。もし戻ったとしたら、またお前の世話になって人間になるつもりだ」

「それが問題なんです」

「え？」

「どういうことなんだ？」

「たしかに、また同じ薬を飲めば人間になれます」

「何だよ。何も問題なんてないじゃん。」

「ただし50%の確率で、ですが…」

「ご、50%…。半分の確率で失敗するってことだよな。」

「身体が薬に対する耐性ができてしまうんですよ」

「耐性とかよくわかんないけど…」

「もし、失敗したら…？」

「失敗したら…海の泡となって消えてしまいます」

「消える？死んじゃう…のか。」

「一度人魚に戻りし者、再び人になるべからず…ってことですよ」

「……………！！」

これじゃあ迂闊うかつに元の姿に戻れない。好きなときに戻って好きなときにまた人間になって…なんて都合のいいことはできないんだ。

「まあ、例外はありますがね…」

「例外？何だよ、それ？」

「今のアナタに知る必要はありません」

意味わかんねえ！知る必要がないってなんか腹立つ言い方だな。

「とにかく、人魚に戻るときはよく考えてください。そのまま人間として生きるのか、人魚として生きるのか」

そんなこと急に言われたって…。俺にどっちかなんて決められない。どっちも大切なんだ。

「それってすぐに決めなきゃ…」

「何をだ？」

その低音美声は…！

振り返るとブレイブがこちらに歩いて来る。話すのに夢中で全然気がつかなかった。

「どうした？そんな顔して…。何かあったのか？」

大ありだよ！！言えるなら相談したいよ！誰でもいい。いや、できればブレイブがいい。でも、そんなことしたら人魚の存在が人間にバレてしまう。

「ブレイブ、俺…っ！」

…ダメだ。言っちゃいけない。言ったらどこにも居場所がなくなる。

「何も言わなくていい」

頭をくしゃくしゃと撫でるその手はとても暖かく思えた。

(やべ…泣きそう…)

「大丈夫か？」

何でそんなに優しいんだよ？

「…っ！」

堪らなくなつた俺はブレイブの胸に飛び込んだ。

「アズール?!」

声が驚いている。

「ちよつとの…あいだけっ、こ…してていいか…?」

何甘えてんだよ…俺。でも、こうしているとほっとする。

「…ああ」

そつと抱きしめて髪をとくように頭を撫でてくれる。

「ひつう…くうっ…」

今だけ甘えさせて。この優しさに浸らせて。あともちよつとだけ…。もうちよつとだけ、このままで…。

秘密（後書き）

遅れてすみません（T—T）

次話はいつupできるかわかりませんm（—）
m

双方の道

城に帰った俺はさつきからずつとぼーっとしている。そのおかげで、シャツに着替えるときボタンを掛け違えた。

（人間と人魚か…）

どっちの世界にも俺にとって同じくらい大事なもの。どっちかの世界で生きることを決めたら別れを選択しなければいけない。

人間として生きること決めれば、母さんやアネキ達、友達と別れることになる。

人魚として生きること決めれば、ブレイブやムゼットやエメルダちゃん、ダトニオ爺さんやその他お世話になったメイドや執事達と別れなくてはならない。

出会いは別れの始まりって言うけど…。

「ブレイブ…」

…ブレイブ？何で今あいつの名前なんて呼んだんだ？

「だーもー！！」

手元にあつた枕をばふつとベッドに向かって投げる。

今日の俺はいろいろとおかしい。さつきだつて、いくら何でもあのタイミングで抱きつくのはおかしい。それが男だなんてもつてのほかだ。今、あるとき言ったことを思い返せば自分の言葉なのに吐き気がする。

ちよつとの…あいだだけつ、こ…してていいか…？

どんだけ女々しい奴が言うセリフだよ。女の子だつてそんなこと、言わないと思う。

多分エメルダちゃんが来たせいで感情の起伏が激しくなってるだけだ。そうだ、そういうことにしておこう！

「じっはんだよおん」

「ぬおおっ！！」

び、びっくりした…。何で突然現れるんだよ。っていうかノックし

る！

「アズールつたら叫んじやってえ〜。エメルダが泊まるからって浮かれてるんでしょ？」

叫んだのは事実だけど、今の俺のどこをどう見たらそういふ風に見えるんだよ！！たしかに嬉しいけど今は浮かれている気分じゃない。

「それはムゼツトの方だろ？」

「はっ…？い、意味わかんないし！」

わっかかりやすい性格。

「とにかくご飯だよ！早く来ないと僕がアズールの分まで食べちゃうからな！」

「おっ、おい、待て…！」

俺のごはん〜っ！！

ムゼツトのあとを慌てて追うといつも見慣れた食卓にエメルダちゃんが入っている。ご飯のために猛ダツシユしたなんてはしたないところは見せられない。ここは優雅に振る舞おう。

「どちらさま…ですか？」

「ええっ？お、俺だよっ、アズールだよ！！！」

なんかすんごく精神的ダメージを受けたんだけど…。どういふことなんだろ。数時間前は楽しく話していたのに…。

「アズールさんって女の方でしょうか？でもそう言われるとアズールさんにすごく似てるわ。…もしかして、あなた…！」

し、しまった！バレたあ〜！！

お呼ばれ

いざバレたとなるとさすがに焦る。相手にどう思われたのかかなり気になる。

ブレイブやムゼットは軽蔑しないと云ってくれたけど…エメルダちゃんはその子だし男とは考え方が違うかもしれない。

「アズールさんって手品ができるんですか？」

ああ、そうだよ…。俺は体が男になったり、女になったりする変人…って、あれ？

「私にだけでもこっさりタネ明かししてくださいませんか？」

何でそうなるんだよ?!いくら俺でもそんなナントカの伝説のナントカ姫みたいなことできないし!

でもまあ、これでごまかせたっばいな。

「エメルダ、そのくらいにしておけ。アズールが困っているだろ」
ブレイブ、ナイス!!

エメルダちゃんはぶうつとかかわいらしく頬をふくらましたけど、ブレイブが優しく微笑みかけるとにこにここと笑顔になった。

「そんなことよりごはん食べよう。今日はエメルダがいるからいつもより豪華なんだよ」

いつも豪華だと思うのは俺だけ…?

ぼんやりしていると料理が次々に運ばれてきた。食べるのがもったいないくらい綺麗に盛られたサラダ。香ばしい独特の匂いを放つ鶏の丸焼き。

「パンはライ麦とバターロール、フランスパンがあります。ご希望ならワッフルもお作りいたしますが…?」

「あ、えと…。じゃあバターロールで」

「僕もそれで」

「かしこまりました。ブレイブ様とエメルダ様は何になさいますか？」

「何でもいい」

「もうっ！そんなこと言うとお用意する方が困るのよ。…私たちはライ麦パンを用意してくださいさる？」

「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

今の俺にはパンよりも目の前の料理のことで頭がいっぱいだった。一度あぶったような鶏肉が切り揃えられているのを見て、思わずよだれが出そうになる。スープも赤い色で食欲をそそる。テーブルの真ん中にはパンケーキが置いてあり、もうどれから手をつけていいかわからない。

そう思いつつパクつとパイを一口食べる。

「っんまい！！」

サクサクとしたパイの中にはスクランブルエッグとミートソースが入っていて、ソースの酸味がたまらない。たちまちたいらげてしまつて、今度は焼豚に手をつけた。

色んな具が入っていてめっちゃめっちゃうまそう。

「僕それ好きだから置いといてよ？」

「ムゼットつたらマリニエール風仔猪胸肉の詰めもの、相変わらず好きなのね」

「だつてさ…」

「心配しなくてもアズールさんはそんなに食べないわよ。ね、アズールさん？」

5枚目の焼豚を口に入れたときに声をかけられた。

「はぐっ…うん？…は、はいっ！」

食べることに夢中になりすぎた…。でもこんなにうまそうな料理が並んでたら仕方ねえよ。それに腹だつて減ってるし。でもけっこう満腹に近づいてきたな…。そう思っていたらちようどデザートが運ばれてきた。

「パンナコッタです。ブルーベリーソースでお召し上がりください」
真っ白なプリンに紫色のソースがよく映える。一口食べると濃厚なミルクの味が広がる。しかし、それはブルーベリーソースの酸味の

おかげで抑えられ、上品な味わいだっただ。

「うう〜ん…うまい……」

はあ…幸せ。

「あの、突然だけど…お願いがありますの」

エメルダちゃんがブレイブの服の裾をちょんちょんと引っ張った。

「みんなにも聞いてほしいの。…しばらくの間、アズールさんをお借りしてもいいかしら？」

「ぶーっ!!」

ムゼットがワインを盛大に吹く。

「うっ…げほっ、げほっ……」

俺ももうちょっとでむせるところだった。なんてこと言い出すんだ。でも何でまた急に…？

「どういうことだ？」

少し苛立ちさを含んだ声。

「だから、アズールさんを私の家に招待したいの。それが無理ならずっとここにいろわ。お父様に何と言われようとも！」

エメルダちゃんの目は本気だった。

ひえ〜！！楽しい食事の席が、一気にピリピリの空気になっちゃった…。

「何でそこまでしてアズールを家に招きたいんだ？」

「それは内緒よ。もしかして…嫉妬？」

まさかブレイブが嫉妬だなんて…。

「っ…」

つて凶星！？なんか意外だな…。

「それなら僕もついて行…」

「だーめ。ブレイブの誕生日のときにまたここへ来るからそれまでの間、ブレイブを頼むわね」

「…うん」

ムゼットはすごく不服そうな目で俺を見る。俺だって嬉しいけど、何でこうなったのかわからない。心当たりもない。

まさか、俺のこと好きになったとか？いやいや、でも、それは…。

「…準備しないの？」

「え？」

さっきまで拗ねていたムゼットがぽつりと呟いた。

「準備だよ。準備。はい、しに行こう！」

椅子から立ち上がり俺の腕を思いっきり引っ張る。

「ちよっ…待ってっ！」

「レッツゴー」

ああ…パンケーキまだ一つも食べてないのに…。ほどよく焼き色がついて、ふかふかとしていて、チョコチップが散りばめられていて、そのパンケーキが目の前から遠ざかっていく。

「俺のパンケーキ…!!」

お呼ばれ（後書き）

今回は初めてご飯を詳しく出してみました！

図書館でフランス料理の本があったので、そこからいろいろ調べました。

友人から、なぜそんなものを借りるのか…と不思議に思われましたが（^ー^；）

m 更新が遅いですが、これからもよろしくお願ひしますm（ー）

宣戦布告

しぶしぶ俺の部屋へとに着くと、クローゼットを開けて服をかばんに詰める。

「やけに素直だな」

好きな人が自分以外の男を家に招いて、自分は招かれていない……。ムゼットはそんな状況下におかれているのだ。本人はエメルダちゃんのこととは好きじゃないって言ってるけど。

「何が？」

「いや、何でもない」

言ったところでこの前みたいに全否定するのはわかっている。

「ふーん。っていうかさ、今度は何企んでるわけ？」

「企むって何をだよ？」

「エメルダだよ。アズール知ってるでしょ？」

「知らねえよ」

俺が聞きたいくらいだよ！え……でも、これだとエメルダちゃんマジで俺に惚れたんじゃない？

「ま、どーせブレイブの誕生日のことなんか考えてるんだろっけど」

あ、ブレイブの誕生日のこと忘れてた。たしかエメルダちゃんがバイオリンを演奏するんだったよな。……って俺歌わなきゃいけないんだった……。

あれ？一緒に練習って言ってたよな。そのためにエメルダちゃんは家に帰る。んで、俺だけ家に招待された。

俺が家に招かれた理由ってもしかして練習のためだけ……とか？

「どうしたの？そんな落ち込んだんじゃって」

「……聞くな」

口に出して言えば余計に悲しくなるだけだ。

「わかった！ブレイブと離れるのが寂しいんでしょ？そんなときの

ためにコレ!!」

どこをどうくみ取ったらそんな発想に結び付くんだよ?

「ちげーよ。何だよ、それ?」

ムゼットは黒い髪を生やした人形を取り出し見せつける。

「ブレイブ人形」

ブレイブと言われるとなんとなくそう見えてきた。

「よくできてるな」

着ている服も本物そっくりで精巧に作られている。

「でっしょお それだけじゃないんだよ、ほら!」

いきなり人形のズボンとその下に履いていたパンツを脱がせた。そんなことしているのを見ると、ムゼットがますます子どもっぽく見えてクスツと笑ってしまった。しかし、何も履いていない人形の下半身を見て俺は硬直した。

「な、なあ、それ…」

何ていうか…その…、リアルっていうか…。あまりにもよくできすぎている。道理でズボンがもっこりしてると思った。

「すごいでしょ。これで夜の営みもバッチリ!」

なっ、何考えてんだ、こいつは…!

「あのかなあ、俺は女が好きなの! エメルダちゃんが好きなんだよ!

!こんなもんいらん!!」

ブレイブ人形をブレイブと少し似た顔の青年に投げつけた。…が、見事に受け止め、ぶーぶーと文句を言ってくる。

「…せっかく執事に作らせたのにさ」

(んなもん作らせんな!!)

「あ、そーだ! ドレスとかかさばるからエメルダに借りれば? 僕からも貸すように言っというてあげる」

「随分と親切なんだな」

立ち直りが早いっていうか、気まぐれっていうか…。

「そんなのエメルダと会話するための口実だよ」

「え…?」

ムゼットの言葉が一瞬理解できなかった。

さっきまでヘラヘラ笑っていた横顔は、いつの間にか挑戦的な笑みを浮かべてこちらを向いている。

「アズールには負けないから」

そう言うところにこつと笑って、いつもの調子で部屋から出て行った。

残された俺は、なぜか、どんどん遠くなっていく足音が聞こえなくなるまで動けなかった。

ムゼットのさっきの言葉が脳裏でリフレインする。

俺だって負けていけない。

「ぜってえ負けねえからな!!」

誰もいない扉に向かって力いっぱい叫んだ。

宣戦布告（後書き）

続きが思い浮かばず逃げてました。
逃げて逃げて逃げて。

そしたら急に書きたくなりました。大したネタも浮かばない癖に。

やっぱり最後まで書きたいんです。魔術師のこと謎のままですし。
今のところ名前がないの彼だけですからね（＾|＾；）

出発の朝

チュンチュンという雀の鳴き声。

ああ、朝が来たのか。だけど、なんか…重い。さっきからなぜか寝返りがうてない。

「うー…ん？」

手でどけようとする誰かに手を握られる。

「おはよ、アズール」

ちゅっ…と、手の甲にキスでもしたのだろう。眠くてはつきりとはわからないけどそんな気がした。

「ムゼット？なんで…ここに？」

眠い目をこすりつつも聞いた。

だってコイツは昨日の夜、俺に負けない宣言したばかりだ。敵地偵察に来たとか何とか言うかもしれない。

「起こしに来たんだよ」。僕はいい子だからね」

自分で言うなよ。っていうか、起こしに来たってことは、俺、そんなに寝過ぎしたのか？！

窓の外には馬車が数台用意されていた。

「ああ。予定より早く出発することになったから、僕が寝ぼすけアズールを起こしに来たってわけ」

俺の様子を見て言葉を付け足した。

「そっか。じゃ、今から用意するから」

顔洗って、歯を磨かないと。その前に、まず着替えだな。

「うん」

「あー…今から着替えるんだけど」

「うん」

「……」

「どしたの？着替えないの？」

「たく何なんだ、コイツは？いちいち言葉にしないとわからんのか！

「フツーに察しろ！俺の部屋から出るって言ってるの！！」
「空気を読め、空気を！！」

「なんで？」

「恥ずかしいとかそんなん言えるわけないだろ。昼間は女の身体だから余計だ。」

「恥ずかしいんだ？かわいいなあ。アズールさえよければ、イロイロ楽しませてあげるけど？昼間限定で」

「楽しませる？」

「こんなヤツに何をすることができるとか疑問だ。思わずムゼットの言葉をおうむ返ししてしまった。」

「「こーゆーことするって言ってんだけどさ……」」

「一瞬視界が宙に舞うと、いつの間にかベッドに押し倒されていた。」

「何すんだよ……と睨んでも全く気にせず俺の服のボタンに手をかけた。ペチィッ！！」

「幸いにも両手は自由だったので、顔面に掌てのひらを思いつき叩きつけてやった。」

「顔狙うなんて卑怯だあ。痛いよう……」

「自分でしくしくと擬態語を言って、わざと泣くふりをしている。」

「黙れ！！自業自得だっ！！」

「ムゼットを部屋から蹴り飛ばして追い出した。たぶん、手にキスをした理由は、ただ単に俺の今の姿が女だからだろう。男だったら絶対にしていない。……ってそんなことはどうでもいい。もうさっさと着替えよう。」

「俺は着替える前に、念のために部屋の前にムゼットがいないことを確認した。いたら……どうなるかは想像したくない。正直着たくはないが、仕方なくワンピースドレスに身を包んだ。」

「あまり人を待たせるのはよくないので、荷物を抱えてダッシュで城の外にある庭まで向かった。」

「アズール様、朝食は中でも食べられるよう準備は整っております」
「よかった」。朝ごはん抜きかと思った。

「ありがとうございます」

けれど、馬車の一台に荷物を詰め込むと思わずため息が出た。

「ふう……」

あわてて周りを確認したけど誰にも聞かれていないみたいだった。何でだろ？ いざ、今から行くと思うと、なぜかノリ気になれない。

「アズール様、お乗りください」

「……」

「アズール様？」

「え？ ああ……はい、今行きます！」

何ぼんやりしてんだよ、俺……。好きな女の子の家に行くんだぞ？

馬車の窓ガラスに映った自分を叱咤した。どうせ、あと2週間ちょっとでまたここに帰って来るんだ。2週間しかエメルダちゃん家にいられないんだぞ？

……2週間もこの城と離れるのか。

自分でも何でこんな気分になるのかわからない。心のモヤモヤにどんな言葉をかけてみても消えることはない。そうこうしている内に馬の蹄ひづめが心地好い音を立てて馬車を動かせ始めた。

俺の不安を乗せたまま、止まることなく……。

出発の朝（後書き）

もともとストックとして作っていたのですが、今回の話、実は370字くらいでした。

…はい、少ないですよ。ほんとは1時00分頃投稿するはずだったんですけど、さすがにこの字数はマズイと思って増やしました（
^ー^:）

いつも書いてから時間を置いて投稿するんです。私は時間が経ったら考え方が変わることがあるんです。そしていろいろ手直しするんです。

しかし、今回は書きたてホカホカを投稿するので少し緊張します…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8681p/>

星屑のメロディー

2011年11月12日12時47分発行